昭和60年12月15日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第24号　通巻645号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
24
12.15.



開発始まるヤンブルグ・ガス田

モスクワっ子が愛する地下鉄

トラ年を前にして

第24号　1985年12月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦

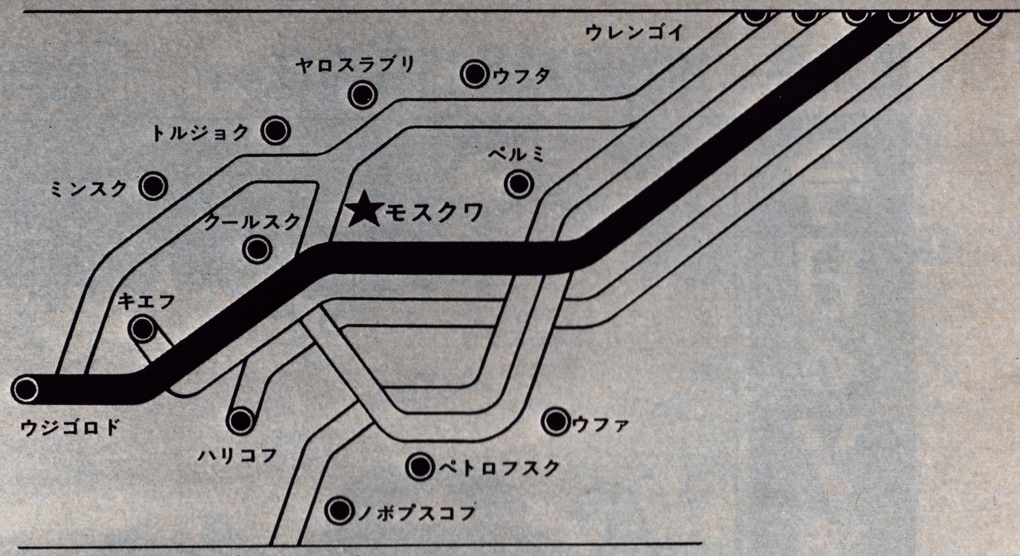


★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

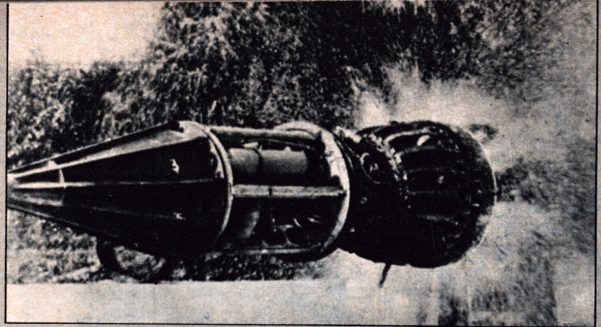


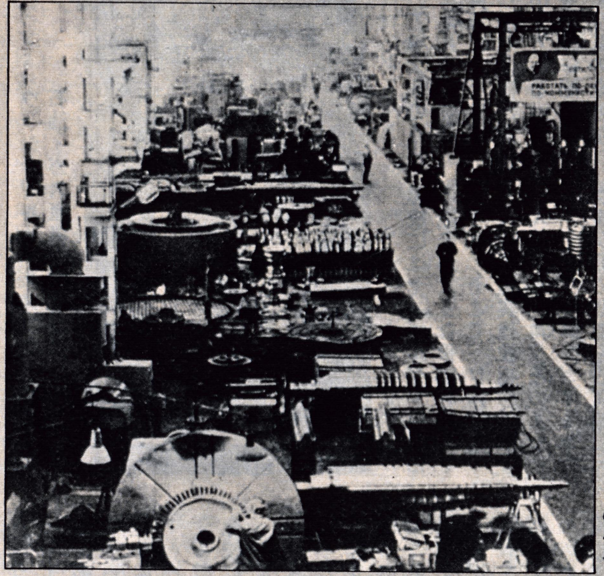
第11次５ヵ年計画期（1981―85年）に建設された
ウレンゴイからの６本のガスパイプライン

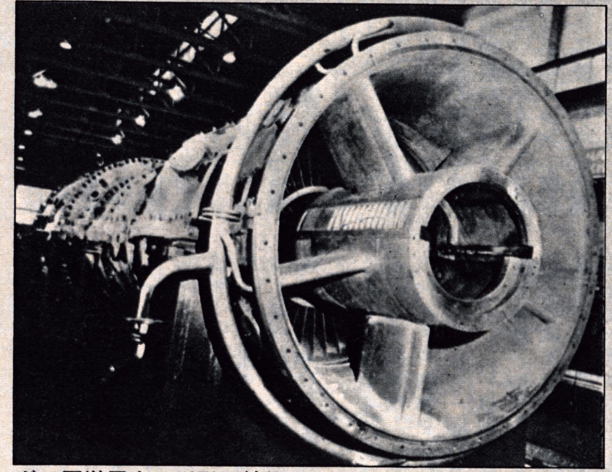


開発始まる ヤンブルグ・ガス田

――チルスコフ・ソ連石油・ガス産業企業建設相に聞く


自動溶接機"セーベル－"


コンプレッサー・ステーションの一つ


ガス圧送用ターボ形圧縮機ＧＮＴ25

ソ連は世界の工業大国のうちで、自国のエネルギー需要を自国の天然資源によって完全に満たし、しかも燃料と電力を大量に輸出している唯一の国である。最近5年間、ソ連の天然ガス生産量の全増加分をもたらしてきたのは、西シベリアにある世界最大級のガス田（複数）である。ここからソ連の諸都市だけでなく、東欧、中欧、西欧の諸国にも"青い燃料"を供給する巨大なガスパイプラインが延びている。

来年には世界的に有名な西シベリアのウレンゴイ・ガス田が設計出力に達し、北極圏内にあるもう一つの大ガス田——ヤンブルグ・ガス田の開発が始まる。一九八四年のソ連の天然ガス生産量は五八七〇億立方mだったが、一九九〇年には西シベリアだけで五〇〇〇—六〇〇〇億立方mの天然ガスを供給する。この数字の達成にはヤンブルグ・ガス田の開発が大きな役割を果たすだろう。ソ連石油・ガス産業企業建設相ウラジーミル・チルスコフとのインタビューと、ウレンゴイ＝ヤンブルグ間の鉄道敷設工事についてのルポ（6ページ）を掲載することにしよう。



ウラジーミル・チルスコフ・ソ連石油・ガス産業企業建設相

ソ連は世界のガス産業史上最大のプロジェクトを完遂した。西シベリアのウレンゴイ・ガス田からソ連欧州部中央、東欧、西欧へ敷設された6本の超長距離ガスパイプラインが稼働している。一九八一—八五年の期間に予定されていたこのユニークなエネルギー動脈の建設計画は期限前に完了した。

「この計画は規模でも、建設速度でも比類のないものだ」——ウラジーミル・チルスコフ・ソ連石油・ガス産業企業建設相はアレクセイ・プチンツェフ本誌記者とのインタビューで語った。「これは世界で最も強力なガス輸送系統だ。口径約1・5mのパイプを溶接した、総延長二万km以上のパイプラインが5年足らずで敷設された。次のことが比較になるかもしれない。シベリアの条件に近いアラスカで、米国人は延長一三〇〇kmの石油パイプラインの建設に3年を要した。

ガスは都市公営事業、鉄鋼業や非鉄金属工業、セメント、化学肥料の生産など多くの工業部門で他の燃料よりも歓迎されている。都市の火力発電所、その他のエネルギー装置のガスへの転換は大気の汚染度を著しく引き下げる。

現在ソ連産ガスの半分以上が採掘されている西シベリアからのパイプライン輸送には、当然割高の費用がかかる。しかし、それでも天然ガスの利用は経済的に採算がとれている。ただし投資額は極北へ進出するにつれ、不可避的に増大する。高い緯度へ一歩進むごとに、問題が増えてくるからだ……」

ウラジーミル・チルスコフ（50歳）は厳しいシベリアの寒さ、永久凍土帯の気紛れ、その他建設関係者がシベリアで直面する何十もの問題に精通している。大臣になる前に、この地で20年以上働き、機械工から大建設本部の本部長までの道を通って来たからだ。

——ウレンゴイから延びている6本のガスパイプラインのうち最も有名なのは、シベリア＝西欧ガスパイプラインだ。このパイプラインはもうセンセーションではなくなったが、相変わらず注目を集めている。このパイプラインについて簡単に話していただきたい。

「ソ連の西欧のパートナーたちが今後20年以上にわたってシベリアの燃料を受け取ることの長さ四四五一kmのガスパイプラインは、以前から存在している結びつきをさらに強固なものにした。ソ連は西欧への伝統的な供給国である。すでに六〇年代末にオーストリアへのガス供給に関する協定が調印され、次の10年間にソ連は同様の契約を西独、フィンランド、イタリア、フランスと結んだ。

"世紀の契約"はソ連の北部地方の開発を促進し、自国用と輸出向けのガスの採掘が増大した。このプロジェクトは西欧のパートナーたちにとってもソ連側に劣らず利益がある——彼らは自国の冶金製品と機械製品の大きな販売市場を得ただけでなく、長期にわたって自らのエネルギー問題の解決を容易にしたからだ」

——米国の"制裁"は制裁の提唱者にとって予想外の役割を果たした。新型のソ連製機械の量産を促進する結果になったからだ。そういう新製品について話してほしい。

「ソ連では、直径一四二〇mmの幹線ガスパイプラインを敷設する際の主要な作業——溝（みぞ）掘りからパイプの敷設、土壌の再耕作までを機械化する機械コンプレクスが開発された。この4年間に約90の新型総合機械が設計され、40以上がすでに量産されている。たとえば永久凍土帯の条件下で毎時一二〇〇立方mの土砂を移すことができるホイール式掘削機がそうだ。36tの荷を積んで走っても、スキーヤーよりも地面に圧力がかからない新型の沼沢地用自動車も量産されている。浅瀬、沼地、冠水地の上を走る貨物輸送用のホバークラフト・プラットホームのテストに成功した。作業中にキャタピラ間の距離を変えられる新型パイプ敷設機がテスト中だ（米国、カナダ、日本の会社がこの軌間可動式キャタピラのライセンスを購入した）。

レニングラードでは出力二万五〇〇〇kWのガス圧送用ターボ形圧縮装置の生産が組織された。この機械は既設のパイプラインですでに活躍している。将来、その出力は四万—六万kWにまで高めることができる。ウクライナで製造されている出力一万六〇〇〇kWのターボ形圧縮装置が非常

によい成績を上げている。この装置には飛行耐用期限の切れた航空エンジンが利用されている。装置はコンパクトで扱いやすく、特別の建物は必要ない。据え付けは実質上、パイルの基礎の上に五つの既製ユニットを固定すればよい。これらのターボ形圧縮機は、実地の使用が証明したように、炎暑の時にも、厳寒時にも確実に稼働する。

西側には口径一四二〇mmパイプ用の自動電気抵抗溶接機"セーベル（極北）"のような装置はない。この機械は1時間でベテランの溶接工の1週間分のノルマを遂行し、しかも高価な溶接棒を必要としない」

——速いという利点は質に影響を与えないか？

「オートメーションで溶接された継手の強度は、パイプラインの長年の使用によってテストずみだ。"セーベル"は大口径鋼管の幹線パイプラインでは初めて使用されたが、これまでに全体として四万km以上のパイプが電気抵抗溶接機で溶接されている。大規模ガスパイプラインでは例外なくすべての継手が点検されている。X線、磁力計、超音波による強度の検査方法を併用して、総合的なチェックをする専門の実験所が設立された」

——西シベリアでは新しいガスコンデンセートの大鉱床——ヤンブルグ・ガス田の開発が始まる。このガス田の特徴は？

「ヤンブルグ・ガス田は一九八〇年代後半のソ連の天然ガス生産の主要な増加分を保障しなければならない。しかしその開発は極めて複雑な課題である。ヤンブルグが北極圏内のタゾフスキー半島にあるからだ。ここはたえず強風が吹き、冬にはしばしば零下50—60度になる北極地帯である。短い夏の間に永久凍土の厚い地層は表面の数十cmだけ溶ける。そのうえここには沼や小さな湖が沢山ある……」

——あまり歓迎すべき情景とは言えないようだ。ところがヤンブルグはウレンゴイよりもはるかに速く開発することが計画されている。どのようにしてこれを実現するつもりか？

「一〇〇〇km余り南にあるチュメニ市の工場で重さ二五〇—三〇〇tの建築用ブロックが組み立てられている。このブロックの内部にはあらゆる必要なボーリング設備が据え付けられる。このブロックは特殊なポンツーンに載せて水路でヤンブルグへ輸送する。係留地から最終目的地までの最後の道のりは、ポンツーンの下につくられるエアクッションで運ばれることになる。今年は最初の24基のブロックがヤンブルグへ到着した。これでガスの総合精製プラント——凍土帯のユニークな工場が組み立てられる。ガスは幹線パイプラインへ送られる前にこのプラントでコンデンセートから分離され、水分や不純物を除去される。工期を速めるために、今後はまるまる一つの工場を収めた一〇〇〇tのスーパーブロックも利用されるようになる。

ヤンブルグ開発で直面する最重要問題の一つは、永久凍土帯との"平和共存"である。精製されたガスは通常、幹線パイプラインへ高温のガスとして入るが、そのため凍土層が溶けてパイプを押し出し、変形させる恐れがある。だから北極地方ではガスはパイプラインへ入れる前にあらかじめ冷やさなければならない。このためには外国で広範に使用されている伝統的な機械ではなくて、ソ連の専門家が開発した原理的に新しい装置を利用することになる。

われわれはヤクーツクの凍土学研究所、ソ連科学アカデミー低温学学術評議会と緊密に協力している。共同で永久凍土帯での建設に関する勧告書が作成され、必要な工学上の計算が行われた。しかし経験が教えているように、永久凍土層の振る舞いに影響するかもしれないあらゆることを予見するのは今のところ不可能だ。だからヤンブルグには、工事をチェックし、地盤の温度条件を観察し、地盤の解凍を防止する地質工学モニタリング部が設置される。

最初のガス井がボーリングされ、中部ロシアのエレツ市まで延びるガスパイプラインの敷設が始まった。ヤンブルグを始点とする幹線ガスパイプラインは全部で6本になる。さらに7本目の幹線パイプラインがウレンゴイから敷設される予定だ。このように、一九八六—九〇年期の西シベリアのパイプラインの建設計画はこれまでよりも大規模になる」

——外国でヤンブルグへの関心が高まっているのは、6本のガスパイプラインのうちの1本によって東欧諸国へ燃料を送ることになるからだが、プロジェクトのこの部分についてもっと詳しく話していただけないだろうか？

「指摘しておきたいが、ソ連からコメコン東欧諸国へのガス供給量は七〇年代にほぼ10倍に増大した。現在われわれはここへ全ガス輸出量の半分以上を供給している。広範囲な地下幹線パイプライン網が共同の努力によってつくられた。そのうち最重要のものが、七〇年代末に建設されたガスパイプライン"ソユーズ"である。南ウラルのオレンブルグ・ガス田を社会主義諸国の工業中心地と結んだこのガスパイプラインは、ソ連のガスの年間輸出量を一五五億立方m増やすことを可能にした。

一九八四年にハバナで開催されたコメコン総会は、ヤンブルグ＝東欧ガスパイプライン（ヤンブルグからの6本のうちの1本）の建設に関する決定を採択した。それは恐らく"プログレス"と命名されよう。現在"プログレス"の建設条件、コメコン加盟諸国の建設への参加形態が綿密に討議され、価格やそれぞれの国への供給量と関連した諸問題が調整されている」

——この新しい幹線パイプラインは技術的見地からどんなものになるか？

「原理的にはわれわれが今日建設しているものと違いはない。それは75気圧を見込んだ一四二〇mmの強力な大口径ガスパイプラインになる。その延長（四六〇五km）は記録的なものになり、従って建設者たちが直面する困難も多いことだろう。新しい幹線パイプラインによって年間三〇〇億—三二〇億立方mのガスが圧送されることになる。それは次の第12次5カ年計画期（一九八六—九〇年）に操業を開始する」



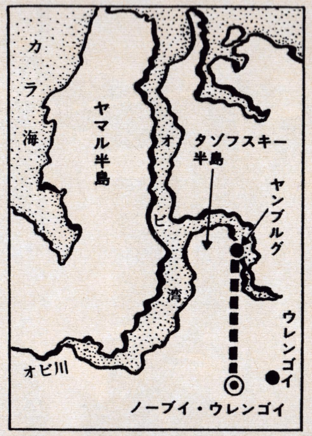
夜も続くヤンブルグの工事

ヤンブルグ・ガス田開発

北極圏の鉄道建設

本誌記者 ワジム・レイボフスキー
カメラ I・ガブリロフ





▲ノーブイ・ウレンゴイの通りは昼なお暗い。

▼エバヤフ川の鉄橋架設工事



西シベリア、チュメニ州の北部。北極圏の中のツンドラ地帯にあるヤンブルグの豊かなガス田は、ウレンゴイの北二三〇kmのところにある。人里遠く離れた厳寒のこの地に、最大クラスのガス採取企業を建設するのは、生易しいことではなく、鉄道がなくてはと



▶厳寒の中で進められるヤンブルグの住宅工事



▼今のヤンブルグはまだひっそり眠っているような感じだ。

ても無理である。専門家の計算によると、年間三〇〇万t以上の貨物がこの地に送られることになるという。

この地区に鉄道を敷設するのも簡単ではない。鉄道路線は、冬の通常の気温がマイナス40度C以下で、夏は土地の大半が泥沼になる北極圏の永久凍土地帯を通るのだ。

ここの土地は平坦で、湖沼が多い。降水量は比較的少ないが、風が強いので、待避駅の列車は30分間で窓まで雪に埋まってしまう恐れがある。だから道床は高くすることになっている。一応、最初の一五〇km分の路盤を築くための土はある。なるほど道床用の土を取る場所の幾つかは、線路工事の現場から20kmも離れているが、これは大したことではない。その先の採土場の土には固く凍結した砂がまじっている。今のところまだこの土を使う段階ではないが、この砂のまじった道床は夏になって溶け、そこが陥没する恐れがある。工事関係者はまずこの問題を解決しなければ



この地方の中心都市ナディムからきたコックのエレーナ・ノビコワさんの顔は明るい。



ヘリで工事要員の交替

ならない。ほかにもこの地方の特別な条件とかかわりのある沢山の問題がある。

空気中の酸素の量が少ないので、人はもちろん機械にも影響が出る。ディーゼル機関車のエンジンも馬力がでない。春の雪どけ水の氾濫はひどいが、土地が平坦なので水の移動はきわめて緩慢である。その上凍土であるため水はけは悪い。

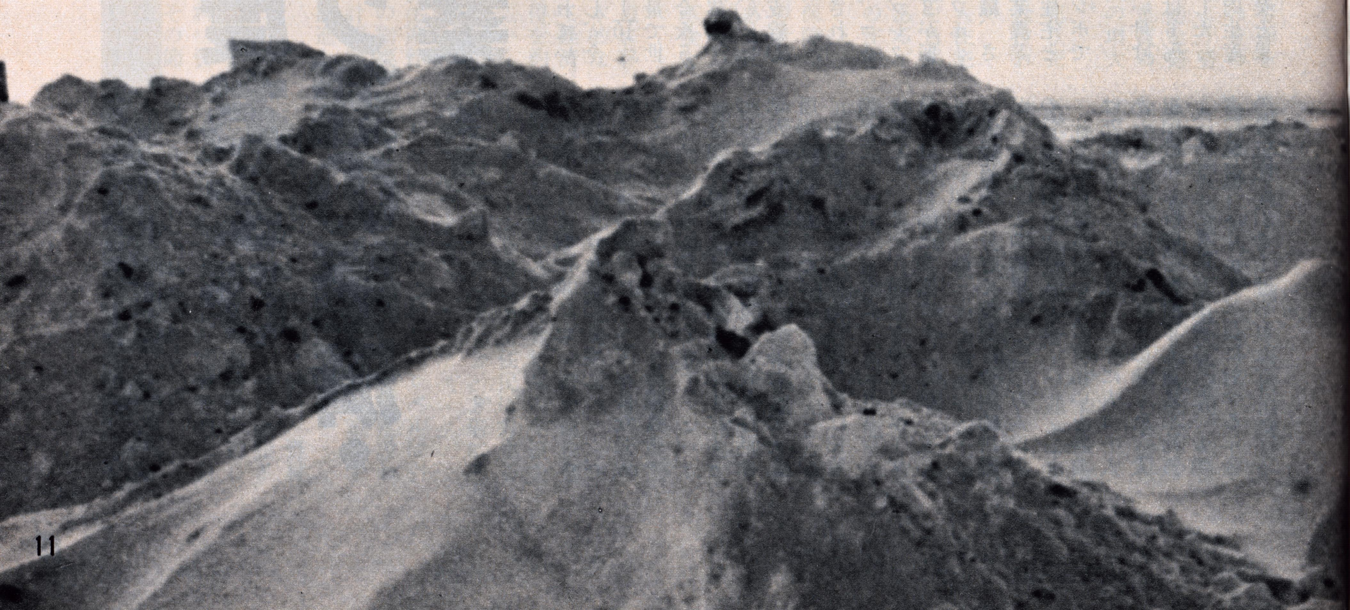
大小の河川が多く、従って60の鉄橋を架けなければならない。ハドゥッテ川の鉄橋は全長七七〇mで、最も長い。しかしこの区間の作業列車の運行開始は、当分迂回線の臨時橋梁施設を使用することになろう。

短い橋の工事は短期間で簡単に終わるのが普通だが、このチュメニ地方の北部の凍土層はこれまで橋梁建設者が一度も出会ったことのないものであり、架橋工事は橋の長さとは関係なく大変な難工事になる。なるほどバイカル・アムール（バム）鉄道の中央部も凍土層であったが、その凍土層はチュメニ地方北部と違って〝元気〟があった。ところがここの凍土層は力がなく、軟らかく、温度も比較的高い。つまり地盤としての信頼性はそれだけ低くなる。橋梁建設者がこういう凍土層に実際に取り組む機会はこれまでなかった。バム鉄道の場合掘ってゆけば、どこでも岩盤が期待できた。ボーリングして岩盤にぶつかれば、あとはもう心配はなかった。岩盤に打ち込まれた橋脚は動いたり沈んだりする気遣いはない。ところがヤンブルグ鉄道の場合は岩盤がないのだ。地盤は凍結度も悪く、流動的で、いわばゼリー状である。しかし、この地盤を何とか利用する必要がある……

延長二三〇km以上のノーブイ・ウレンゴイ＝ヤンブルグ鉄道は一九八四年秋に起工され、すでに数十kmの軌条が敷設された。ここに掲載したイーゴリ・ガブリロフ撮影の写真は、この地方の厳しい条件と建設工の生活を生々しく伝えている。



ヤンブルグの掘削工事



ソ連共産党第27回大会に向けて

「一九八六―一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」草案（要旨）

一九八五年10月15日のソ連共産党中央委総会で承認され、来年2月のソ連共産党第27回大会で検討される表題の文書が、全国民の審議のために11月9日付ソ連各紙に公表された。以下はタス通信によるその要約。

レーニンの遺訓を一貫して守りながら共産党はソ連国民を社会主義の完成、ソビエト社会の共産主義への一層の前進に沿って着実に導いている。

数世代のソ連人の労働によって強大な経済力、科学技術力、文化の力がつくり出された。科学技術の発展の多くの方向でわが国は世界で主導的な地位を占めている。住民の福祉はたえず増進し、社会主義的生活様式が改善され、社会的公正の原則がますます完全に実現されている。資本主義制度に固有の恐慌、貧困、失業、階級的・民族的敵意は、永久に過去のものとなった。人々の平等、協力、相互援助が確立され、真の民主主義が確立された。

計画経済制度、国民の社会主義的自治の長所と勤労大衆の創造的可能性がますます完全に発揮されている。平和と社会進歩のとりでである社会主義兄弟諸国の共同体が強化されている。

ソ連共産党第26回大会の決定の遂行過程で、ソ連人の福祉の向上、すべての経済部門の発展に新たな大きな一歩が踏み出された。

わが国の経済力は大幅に伸びた。国民所得は一九八〇年に比べて17%増大した。国民経済の物質的・技術的基盤の強化、住宅建設、社会・文化施設その他の施設の建設に、八四〇〇億ルーブルを超える投資が振り向けられた。一〇〇〇以上の新しい現代的工業企業が操業を開始した。

生産を集約化し、その効率を高める上で前向きの成果があった。社会的労働生産性の上昇によって、国民所得の増加分のほぼ90%が得られた。

経済の基幹部門である工業は、さらに発展した。その生産高は一九八〇年度に比べて20%増大した。消費財生産は生産手段より高率の伸びを示した。

ソ連エネルギー計画が遂行されている。原子力発電が加速的に発展し、全国の電力生産の中でのシェアは$\frac{1}{10}$となっている。従来から石油採掘量で世界第1位を占めていたソ連は、今次5カ年計画中にガス採掘量でも世界第1位に進出した。総延長四万八〇〇〇kmの幹線ガスパイプラインとその支線が建設された。

党の農業政策が一貫して実施され、ソ連食糧計画が実現されてきた。コルホーズとソフホーズ、農工コンプレクス全体の強化に、投資総額の$\frac{1}{3}$が振り向けられた。コルホーズとソフホーズの経済が強化され、企業や組織、さらに都市および農村の住民の副業農業経営が発展している。農村では住宅と社会・文化施設の建設が高いテンポで実施されてきた。

農産物の基本品目の生産と買い付けが増えた。年平均農業総生産高は6%増えて一三一〇億ルーブルに達した。第10次5カ年計画期と比べて食肉生産量は10%、卵は18%増えた。野菜と果物の収量は大幅に増えた。

輸送トンキロ数は15%増えた。シベリアと極東の開発にとって重要な意義をもつバイカル・アムール幹線鉄道でローカル運転が開始された。

経済の高揚とその効率の向上にもとづいて、国民の物質的・文化的生活水準が高まった。人口一人あたりの実質所得は11%増えた。

労働者・職員の平均賃金月額は13%増えて、一九八五年に一九〇ルーブルに達した。社会化経営でのコルホーズ員の労働報酬は29%増えて月額一五〇ルーブル以上となった。

労働報酬の分野で重要な全国的措置がとられ、その結果二〇〇〇万人以上の賃金が引き上げられた。

社会的消費基金からの支払いと特典は25%増えて、一九八五年に人口一人あたり約五三〇ルーブルに達した。大祖国戦争参戦者と戦没軍人遺族の物質上、生活上の条件が改善された。労働者、職員、コルホーズ員に対する年金の最低額が引き上げられた。

10年以上前に年金生活に入った労働者・職員の大きなグループに対する年金額が増やされた。勤続年数に対する年金の追加割り増しが導入された。

子供のいる世帯や働く母親を援助する大がかりな措置が実現された。

多くの商品やサービスに対する住民の要求が一層完全に充足されるようになった。小売り商業売上高は16%、住民に対する生活サービス量は$\frac{1}{3}$、それぞれ増えた。

ソ連では住宅問題が首尾一貫して解決されている。総面積五億五〇〇〇万平方mを超える住宅が使用に供され、五〇〇〇万人以上の住宅条件を改善することができた。

連邦構成諸共和国の経済は計画的に成長し、全国家的課題を解決する上での各共和国の寄与が高まった。大規模な地域生産コンプレクスの形成と発展が続いた。東部と北部の諸地域の天然資源が急速に開発されてきた。いま西シベリアは全国の採油量の$\frac{2}{3}$、ガス採掘量の半分以上を産出している。

ソ連は国際分業にますます積極的に参加している。ソ連とコメコン加盟諸国その他の社会主義諸国との協力は目立って強化され、社会主義的経済統合が深まった。コメコン加盟諸国首脳経済会議の決定で定められた措置が実施されてきた。

外国貿易高が増え、経済交流が拡大された。現在ソ連は一四五カ国と貿易関係をもっている。

とはいえ、ソ連の国民経済の発展には欠陥があった。生産の集約化、生産構造と管理および経営の方法の再編成は、予定より遅れて実施されてきた。新技術開発のテンポも不十分だった。一部の共和国、省、公団、企業は5カ年計画の指標を達成しなかった。個々の食料品の住民への供給に困難が生じている。

国際情勢の緊迫化に関連して、ソ連は自国の防衛力をしかるべき水準に維持し、ソ連国民に平和な生活を保証するための追加措置をとることを余儀なくされた。

今後の15年間は、社会主義の完成、共産主義建設の道での重要な歴史的期間である。

党の経済戦略の最高目標は、国民の物質的、文化的生活水準を一貫して引き上げることであったし、今もこれに変わりはない。当面の期間にこの目標を実現するためには、社会・経済発展を加速し、科学技術進歩の基盤の上で生産を鋭意集約化し、その効率を高めることが必要である。生産力と生産関係を質的に新しい段階に引き上げ、科学技術進歩を抜本的に促進し、経済発展の戦略的方向での急速な前進を確保し、これまでの歳月全体を通じて蓄積されたものにほぼ匹敵する規模の生産力をつくり出さなければならない。

二〇〇〇年までの期間に、住民のあらゆる層と社会グループの福祉の一層の向上、人々の労働面と生活条件での深い変化を保障し、経済発展の社会的指向、個性の調和のとれた発達に好適な条件づくりと社会主義的生活様式の強化をめざすその方向を強めなければならない。

広範な社会計画の実施が計画されている。人口一人あたり実質所得を1・6倍ないし1・8倍に増やす予定である。

住民の完全な合理的な雇用を確保し、労働条件を本質的に改善し、手労働をもっと急速に減らして生産面でのそのシェアを15―20%にまで下げるよう努力し、すべての市民の創造的才能を発展させ活用する可能性を広げ、良質の商品やサービスに対するソ連人の増大する欲求をもっと完全に満たす。

国営商業と協同組合商業の小売り売上高をおよそ1・8倍に増やさなければならない。

一世帯―フラットあるいは個人住宅の確保という重要な社会的課題を首尾一貫解決していくことが必要である。少なくとも総面積二〇億平方mの住宅が建設される。

無料の国民教育、保健と社会保障の全国家的制度の一層の発展と勤労者の休息条件の改善の重要な手段である社会的消費基金の急速な増大に向けられた路線を継続する。社会的消費基金をおよそ2倍に増やす。

生産を優先的に集約的発展の道に移行させ、社会的労働生産性の抜本的な向上をはかり、これにもとづいて経済成長率を速める。ソ連の国民所得を約2倍に増やす。

国民所得と物的生産の全部門の生産高の増加分を労働生産性の上昇によって完全に保障する。社会的労働生産性を2・3―2・5倍に高め、この指標で世界的に高い水準を達成する計画課題を実現する上で決定的な一歩前進を行う。

生産集約化の重要な要因の一つである節約体制の強化をはかることが重要である。燃料、エネルギー、原料、資材の消費の増加分の75―80%をその節約によって充足しなければならない。国民所得の単位あたりエネルギー消費量を$\frac{5}{7}$以下に、同じく金属消費量をほぼ半分に減らす。

科学技術進歩と社会的諸課題の解決を決定する部門や生産を優先的なテンポで発展させる。工業生産高を2倍以上にする。

燃料・エネルギー・コンプレクスをもっと効率的に発展させ、ソ連エネルギー計画を実現する。

国の燃料・エネルギー需給バランスを改善するため原子力発電所の電力生産を5―7倍以上に増やし、ガスの産出量を1・6―1・8倍に増やす。従来利用されていなかった再生可能エネルギー源を広範に利用する。

農産物に対する国の需要の完全な充足、農業の物質的・技術的基盤の一層の強化と農村の社会的改造をめざすソ連食糧計画の路線を首尾一貫実施していくことが必要である。農工コンプレクスの加速的で均衡のとれた発展を実現し、この目的に向けられたすべての種類の資源の効率を高める。

消費財生産とサービス分野の総合発展計画を実現する。非食料品の生産を1・8―1・9倍以上、住民に対するサービスの量を2・1―2・3倍にそれぞれ増やす。

基本建設を質的に新しいレベルに引き上げる。今後10年間に施設の建設および改修の工期を$\frac{2}{3}$―$\frac{1}{2}$に短縮する。

運輸、電力・石油・ガス供給、資材・機器供給システム、その他の生産インフラストラクチャーの諸部門を新しい技術的基盤にもとづいて加速的に発展させることが必要である。

互恵にもとづく諸外国との貿易・経済、科学技術、文化交流を発展させる。

まず第一に社会主義共同体諸国との国際分業の利点を完全に利用することが必要である。

コメコン加盟諸国および他の社会主義諸国との協力の一層の全面的な発展をはかり、社会主義的経済統合をより高い段階に引き上げ、生産の専門化と協業化、協力の新しい効果的な形態を発展させる。

コメコン加盟諸国とともに二〇〇〇年までの期間の経済・科学技術協力計画を二国間および多国間をベースにして首尾一貫実現していくこと、二〇〇〇年までのコメコン加盟諸国の科学技術進歩共同総合計画を不断に実現することが必要である。

発展途上諸国との経済および科学技術協力を拡大する。関心をもつ資本主義諸国との経済相互交流を互恵と同権にもとづいて発展させる。

第12次5ヵ年計画（一九八六—九〇年）の主要課題は、科学技術進歩の促進、技術更新、生産企業の改修、建設された生産施設の集約的な利用、管理システムの改善を基盤とした経済発展のテンポと効率の上昇およびこれにもとづいたソ連国民の福祉の一層の向上の達成にある。

消費と蓄積に利用される国民所得を19—22%増やす。国民所得の増加分のすべてを社会的労働の生産性の上昇によって保障する。単位生産あたりの資材消費量を4—5%、エネルギー消費量を7—9%、金属消費量を13—15%それぞれ減らす。

工業生産高を21—24%増やし、そのうち生産手段（Aグループ）を20—23%、消費財（Bグループ）を22—25%増やす。

工業の加工部門を優先的なテンポで発展させる。燃料・原料部門の生産高を11—13%増やすもとで加工部門の生産高を25—28%高める。主として燃料・エネルギー資源の全面的な節約、原子力発電、ガス産業、露天掘りによる石炭採掘の急速な発展によって燃料とエネルギーに対する国の増大する需要を充足する。

国民経済における労働生産性を全体として20—23%上昇させ、工業のそれを23—25%伸ばす。労働生産性の上昇によって工業と農業の生産高の全増加分、さらに鉄道輸送における輸送量と建設における作業量の増加分を得なければならない。労働報酬の増加を上回る労働生産性の伸びを確保する。

節約体制を強化することが必要である。

一九九〇年に国民経済全体で一九八五年と比較して、原子力発電の発展による七五〇〇万—九〇〇〇万tの節約を含めて標準燃料換算で二億—二億三〇〇〇万tの有機燃料を節約し、鋼材を一二〇〇万—一四〇〇万t節約することが必要である。

建設部門では鋼材の使用量を13—15%、セメントのそれを8—10%、木材を10—12%減らす。

製品と作業の原価を、工業では4—5%、建設では2—3%、農業（ソフホーズ）では5—7%下げる。

国民の物質的、文化的生活水準の一層の向上をめざす措置体系を実施し、国民一人あたりの実質所得の13—15%の伸びを確保する。商品とサービスに対する住民の需要の充足を大幅に改善して、伸びる一方の有効需要の構造における前向きの変化をめざす。

科学技術進歩を全面的に促進するという重要な政治的、経済的課題の解決を保障する。生産力の質的変革、経済の全面的集約化の軌道への移行、社会的生産の効率の向上に果たす科学技術の役割を断固として引き上げる。社会的諸課題の解決への科学技術発展の指向を強化する。

何よりもまず投資・構造政策の再編、エレクトロニクス、原子力発電、総合的自動化、新素材の製造・加工技術の発展といった科学技術進歩の最重要方向への資源の集中によって、生産の技術的水準の抜本的な向上を成し遂げる。

5年間に社会的労働生産性の伸び分の少なくとも2/3を、科学技術の成果を活用することによって得る。

生産技術の改善をめざす一連の措置を実施する。進歩的なベーシック・テクノロジーの応用を第12次5ヵ年計画期に1・5—2倍に拡大する。労働生産性を何倍も向上させ、資源の利用効率を上げ、単位生産品当たりの資材使用量を下げることのできる原理的に新しい技術の国民経済への広範な導入を確保する。栽培業と畜産業において工業的、集約的技術へ移行し、生物工学と遺伝子工学の方法を幅広く利用する。

生産の組織上、技術上の柔軟性を徹底的に向上させる。計画化や設備の管理、製造加工プロセスの管理をはじめとするさまざまな生産分野に自動化システムを導入する。生産の自動化レベルを約2倍に上げ、迅速に経済的に組み替えられる総合的自動化生産をつくり出す。

新世代の効率の高い設備・機器の開発と生産現場への設置を速める。機器システムと製造加工設備コンプレクスの生産に移行する。機械工業の総生産高の中での新開発機器の比率を少なくとも13%にまで高める。パーソナル・コンピューターの大量生産をめざす。電算機器の生産高の2—2・3倍の伸びを確保する。あらゆるクラスの現代的な高能率電算機の導入規模を急テンポで伸ばす。共同利用の計算センターや統合的なデータバンク、情報処理・伝達網の開発を続行し、活動効率を向上させる。

高級、高品位の工業製品の割合を1・9—2・1倍に増やし、設備・機器の信頼性を高め、耐用期間をのばし、品質管理の総合的システムの導入を基本的に完了する。製品の規格と技術的条件の見直しを促進し、世界最高レベルの達成をめざす。工業製品の評価検定作業のレベルを高め、品質の客観的評価の確保をめざす。

重工業の基本課題は、燃料・原料資源、機器、設備その他の現代的生産手段の国民経済への供給、住民用の高品質商品の増産、重工業の諸部門の作業効率の向上である。

エネルギー機械工業では、原子力給熱ステーション用の設備や、辺地用の小出力発電装置の生産を確保する。単機出力一二万—一五万kWの大型ガス発電タービン、および高落差用、揚水式発電所用の水力タービンの原型を開発し、生産を組織する。

電機工業では、出力八〇万kWまでのタービン発電機の単一規格シリーズ、原発用の単機出力一〇〇万kWの信頼性の高いタービン発電機、省エネルギー型光源、および出力四〇〇kW以下の交流発電機の新シリーズの生産を大幅に増やす。

非鉄金属工業では、三〇〇種類以上の新製品の生産を開発する。スクラップ、廃棄物、以前には利用されていなかった加工困難な原料の加工による一九九〇年の非鉄金属の生産を少なくとも一九〇万tとする。

電力生産においては、一九九〇年の発電量を一兆八四〇〇億—一兆八八〇〇億kW時とする。このうち原子力発電所における発電量を三九〇〇億kW時とする。

国の単一電力系統の形成を続行し、交流五〇〇kV、七五〇kV、一一五〇kVと直流一五〇〇kVの連系送電線、および配電網の建設を実施する。

石油産業においては、一九九〇年の採油量（ガスコンデンセートを含む）を六億三〇〇〇万—六億四〇〇〇万tとする。西シベリア、カザフ共和国、国内欧州部北部の採油業の発展を続行する。カスピ海沿岸低地の深層石油鉱床の工業開発に着手する。大陸棚の石油・ガス鉱床の開発と、そのために不可欠な生産・技術基盤の形成を促進する。

ガス産業では、一九九〇年の採ガス量を八三五〇億—八五〇〇億立方mとする。

石炭産業では、一九九〇年の採炭量を七億八〇〇〇万—八億tとする。生産高の伸び分全体を労働生産性の向上によって確保する。

クズネツク、カンスク・アチンスクその他の東シベリアと極東の炭田の発展を促進する。

農工コンプレクスの主要課題は、農業生産の着実な伸びを達成すること、食料品と農産原料を国に確実に供給すること、ソ連食糧計画に従った高い最終的成果を得るため、コンプレクスのすべての部門の努力を結集することにある。

農業においては、主として集約的発展要因や、科学技術、先進的実践の最新の成果の導入、創出された生産力の効果的な利用によって、年平均総生産高を14—16%増やす。

一九九〇年の収量を、穀類二億五〇〇〇万—二億五五〇〇万t、ビート九二〇〇万—九五〇〇万t、ヒマワリ七四〇万—七五〇万t、ジャガイモ九〇〇〇万—九二〇〇万t、野菜およびウリ類四〇〇〇万—四二〇〇万t、果物・漿果一四五〇万—一五五〇万t、ブドウ一〇五〇万—一一五〇万tとする。

一九九〇年には原綿二八〇万—三〇〇万t、実綿九一〇万—九四〇万tの収量を確保する。繊維の技術的特性がより高い綿花の作付けを拡大し、その歩留まりを増やし、ロスを少なくしなければならない。亜麻繊維の生産を増やし、その品質を向上させ亜麻の工業加工量を総生産高の50—60%に引き上げ、茶の生産高や亜熱帯作物、精油作物、その他の収量を増やすことが見込まれている。

飼料基盤の強化、遺伝学、育種の成果や家畜の品質改良の新しい生物学的方法の利用に基づいて、家畜と家禽の生産性を大幅に高め、畜産品の生産の着実な伸びを保障する必要がある。一九九〇年には食肉の生産高を二一〇〇万t（屠殺重量で）に、牛乳の生産高を一億〇六〇〇万—一億一〇〇〇万tに、卵の生産高を八〇〇億—八二〇億個にする。

5年間で、国家投資によって三三〇万haの灌漑地と三六〇万haの干拓地の利用を開始し、八三〇万haの土地で開拓作業を実施し、五六〇万haで既存の灌漑システムの技術状態を改善する。

水資源の地域的再配分の科学的根拠の信頼性を高め、北方河川の流量の一部をボルガ川流域に、さらにボルガ川からドン川、クバン川に転流させる作業、ドニエプル・ブグ運河およびドナウ・ドニエプル運河第1期工区の建設作業を展開する必要がある。

一九九〇年には三〇〇〇万—三二〇〇万tの化学肥料、四四〇万—四八〇万tの農薬、一億t以上の石灰を農業に供給し、有機肥料の利用を一五億tにする。

農業生産の設備更新を実現しなければならない。5年間に一九〇万台のトラクター、一六〇万台のトラック、一七七万台のトラクター用トレーラー、農業機械・設備——総額にして四三〇億ルーブル以上を農業に供給する。このうち、畜産、飼料生産向けは一七〇億ルーブル。

食品工業部門では、生産高の18—20%増を確保することが決まっている。定量包装された形での食肉および食肉半調理品の生産を増やし、総販売量のうちのこれらの割合を40—45%にする。

牛乳の利用を改善し、ジャム、コンポート、ジュースの生産を大幅に増やす。暴飲やアルコール依存症防止闘争を強化する措置を一貫して実施するために、リキュール、ウォツカ、ワイン、アルコールの製造企業の一部を住民の需要の高い食品の製造に切り換えることが予定されている。

各共和国・地域の例外なくすべての部門の最重要課題の一つは、ソ連人の福祉の向上に関連した多様な課題の解決への貢献を増大し、一九八六—二〇〇〇年の消費物資生産・サービス部門総合発展計画を一貫して実施することだ。

向こう5年間に非食料品の生産を1・3倍以上に増やす。住民への有料サービス量を1・3—1・4倍に増やし、その質とサービス水準を高める。農村部での住民サービスはより高いテンポで発展する。

軽工業では、一九九〇年に織物の生産高を一四〇億—一五〇億平方m、ニット製品の生産高を二二億—二三億着、靴の生産高を九億足にする。

文化・生活用品の生産を1・3—1・5倍に増やすことが見込まれている。

あらゆる種類の交通機関の住民サービスを改善する。一九九〇年には公共交通機関の乗客輸送量を12—14%増やす。既存の地下鉄の発展と新しい地下鉄の建設を続け、チェリャビンスク、オムスク、クラスノヤルスク、アルマアタ、リガ、その他の国内大都市で地下鉄路線の建設を開始する。

運輸部門の基本課題は、輸送に対する国民経済と住民の要求をタイムリーに、うまく、完全に満足させ、その活動の経済効率を引き上げることだ。鉄道輸送、海上輸送、パイプライン輸送、自動車輸送、航空輸送、企業内輸送および通信の一層の発展をめざす。

なかでも、二三〇〇kmの新規鉄道路線の運行を開始し、四〇〇〇km以上を複線化し、八〇〇〇kmを電化する。

5年間に国民経済への投資を18—21%、請負作業量を15—16%増やす。同時建設中の施設の量を大幅に減らし、建設半ばや未完成の建設工事数を標準レベルにする。

国民福祉の一層の向上、ソ連人の高

まる物質的・精神的欲求のより一層完全な充足が見込まれている。消費水準の引き上げと消費構造改善を一貫して実現し、食料品・非食料品の住民への供給を改善し、5年間で小売り販売量を18―22%増やす。

労働者・職員の月平均賃金を13―15%増やし、二一五―二二〇ルーブルとする。労働報酬システムの効率を引き上げ、働き手の報奨金額と労働上の貢献をもっと緊密に関連させ、一律平等主義の要素を断固として排除し、仕事上の欠陥と手落ちに対する物質的、道徳的責任を強化する。

国民経済の生産諸部門においては、段階的に、必須条件の整備と資源の探求に応じて、労働者・職員の等級賃金と職務給の引き上げを実施する。教師その他の国民教育従事者に対する賃金増額をめざして開始されている措置の実施を完了し、保健従事者の段階的賃金引き上げを開始する。学術研究機関、設計機関、テクノロジー関係機関、企画機関の働き手の労働報酬を改善し、それらの人々の賃金と、新技術や先端技術の開発と導入による効果とのかかわりを強化する。

労働の組織と報酬の形態、労働ポストの評価の改善をめざして実施されている作業と労働ノルマの設定とを密接に関連させることにより、ノルマ設定を大幅に改善する。

コルホーズ員の月平均労働報酬を18―20%増やし、その伸びと農産物の増産、品質、生産効率とを関連させる。

社会的消費基金を20―23%増やし、それらを社会的、経済的課題の解決に合理的に利用する。子供のいる世帯に対する援助を拡大し、婦人の労働と生活の条件を改善する。段階的に、地域別に、母親に対する一部有給の育児休暇の期間延長を実施する。妊婦のための専門の予防診療所網を発展させる。

住宅建設協同組合への加入と個人住宅の建設に際しての若い世帯への特典や優先権を拡大する。

近年中に、子供に就学前施設を確保する問題を解決し、そこでの保育条件を改善する。およそ三〇〇〇万人を収容する就学前施設を建設する。

参戦軍人と労働のベテラン、労働能力を喪失した市民、軍人遺族に対する配慮を強め、年金保障を改善する。労働者・職員に対する年齢年金と身体障害年金、以前に決められたコルホーズ員に対する年金の最低額をさらに引き上げ、年金受給者への社会・生活サービスを改善する。

フラットのレイアウトを改善した総面積五億六五〇〇万―五億七〇〇〇万平方mの住宅を建設する。

新開発地区、とくにシベリア、極北、極東の諸地区における住宅および社会・文化建設への国家投資の優先的な配分を保障する。

国民教育制度と保健制度、休息と観光、体育とスポーツの組織の一層の発展をはかる。

ソ連は、コメコン加盟諸国首脳経済会議の諸決定の首尾一貫した実現にもとづいた社会主義兄弟諸国との経済協力を全面的に完成させ、豊かなものにしていく。

重要な国民経済諸課題を解決し、社会主義共同体諸国の統一と団結および、その世界における地歩を強化する上での社会主義的経済統合の可能性のより完全な利用を確保する。

コメコンの枠内や二国間で兄弟諸国と科学、技術、工業、農業、運輸、基本建設における大きな問題の共同の効果的な解決、さらに生産の専門化と協業化、貿易、その他の種類の協力の発展の新しい形態と可能性の探求を目的として、経済政策、科学技術政策を調整する。経済・社会発展計画の調整をもっと完全に実施する。他のコメコン加盟諸国とともに、社会的生産の発展の促進と効率の向上、その国際分業への参加の拡大におけるベトナム社会主義共和国、キューバ共和国、モンゴル人民共和国への国際主義的援助を継続する。

集団で作成される諸決定を考慮に入れて、先端的な設備・機器、テクノロジー、素材の開発と導入におけるコメコン加盟諸国との協業を広範に発展させる。兄弟諸国の諸企業との直接的な生産交流の発展、さらに合同企画の設立も含め、各公団と企業をこの作業にもっと積極的に参加させる。相互に供給される製品の技術・経済水準と品質を全面的に高め、コメコンの枠内での標準化と規格統一を拡大する。

コメコン加盟諸国と共同で一連の大規模なプロジェクト――ヤンブルグ＝ソ連西部国境間の幹線ガスパイプライン、原子力発電所と原子力給熱ステーション、クリボイログ採掘・選鉱コンビナートの建設、カスピ海沿岸低地の石油・ガス鉱床の開発、共同体諸国の合同電力系統の一層の拡大――の実現を保障する。

共同で作成した農業の物質的・技術的基盤の発展、軽工業と食品工業企業の設備更新、食料品と国民消費用工業製品の相互供給の拡大に関する措置を実施する。兄弟諸国との合意を見た燃料や原料の合理的な利用と全面的な節約、単位生産あたりエネルギー消費量と資材消費量の引き下げ、新しいエネルギー源の開発に関する措置を実現する。

発展途上諸国との協力も深める。工業企業の建設、運輸の発展、農業の機械化と土地の灌漑、鉱物原料や燃料の地質探査、民族要員の養成、その他の分野で発展途上諸国を援助し、これらの国々における自然の富の生産への導入と商品の増大、民族経済の確立と発展、独立と進歩の道に沿った前進を促進する。

互恵と同権にもとづいて関心をもつ資本主義諸国との安定した貿易、経済、科学技術交流を発展させ、これらの国々との協力形態を改善する。

なによりもまず機械、設備、その他の高度な加工製品の販売量の増大によって諸外国との貿易構造を改善する。

国民経済の管理を一層改善する。第12次5カ年計画中に経済の全部門を新しい経営方法に移行させる。

国民経済の管理において、単一の中央集権的指導と経営のすべてのレベルにおけるイニシアチブ、創造的積極性、高い責任とを結合する民主集中制を首尾一貫改善、発展させる。勤労者を、ますます広範に生産管理に参加させる。

連邦構成共和国、自治共和国の閣僚会議、人民代議員ソビエトの権限を拡大し、経済・社会発展の諸問題の適時な正しい解決に対するそれらの責任を高める。

コメコン加盟諸国との計画化および経営の先進的な経験の交換を改善する。

永遠の勝利

――戦勝40周年を振り返って

ソフィア・スサーニナ

一九四五年5月9日。おそらく、これほど多くの人間がこの地上で幸福感を味わった日は歴史上なかったのではあるまいか。この日ヒトラー・ドイツとの戦争が勝利に終わったのである。平和の喜びがやってくるまでにはたまらないほど長くかかったし、その代償は空前のものになった。五〇〇〇万以上の人命が平和の代償に支払われたのである……

あの一九四五年に人々は狂喜乱舞した。ついに戦争の砲声がやみ、もうこれ以上死者を葬ったり、新しい人命の損失を予想しなくてもよいことになったからだ。不安、不幸、窮乏という重荷が肩から落ち、自分の家を建て、親しい者の声を聞き、好きなことに没頭し、日の光と木や草の緑を楽しむという、普通の生き方ができるようになったからだ。

ことしは戦勝40周年だった。大祖国戦争に参加した私たちは、もう一度あの頃の昼と夜へ、あのときの戦いへ、戦死した者と勲功を立てた者のことへ思いをめぐらせた。私たちの子供と孫たちはあの戦争のこと、それが辛く苛酷で長い戦争であったことについて知識を深めた。

あの戦争のどの日よりも第一日目のことがよく思い出される。その日私と、歴史・哲学・文学大学の学友たちは19世紀西欧文学の試験の準備をしていた。その日、すなわち一九四一年6月22日の朝、私たちは大学の図書室でのんびりと本を読んでいた。窓の外は日の光と公園の緑が輝くばかりだった。木陰の下へ駆けて行きたいという誘惑に打ち勝つのは困難だった。急にドアが音を立てて開いた。入口に詩の好きな学生が姿を見せて、叫んだ。「みんな、戦争だ！」 すると、その瞬間からなにもかもひっくり返ってしまった。どれほどひっくり返ったのかも、すぐには分からなかったほどだ。もはや〝母校〟に集まることはもうないのだということも分からなかった。

緒戦の数カ月の退却、西から東への疎開、モスクワ攻防戦、レニングラード封鎖、敵の占領地における同胞の苦しみと闘い、南部の激戦、北カフカズ、スターリングラード（現在のボルゴグラード）、クールスクとオリョール付近の会戦と勝利、ベロルシア、ウクライナ、バルト海沿岸地域の解放、一九四一年以前にすでに戦場となり占領されていた欧州の諸国民を助けるための遠征――これらすべてを私たちは一九八五年に改めて追体験した。

勝利40周年にあたる一九八五年の一年間、この戦争に参加した人々――六五〇〇万人にのぼる前線の将兵とパルチザンと地下運動の参加者たちはヒーローだった。そのひとりひとりが惜しみなく暖かい心づかいを受けた。4月7日にはソビエト政府が旧参戦軍人の新しい特典に関する決定を採択した。薬価の50%割引（傷病軍人は無料）、家賃、光熱費・水道代の50%割引（以前は傷病軍人だけの特典だった）。老齢年金の20%上乗せ、このほかにも沢山ある。旧参戦軍人に対する勲章に新しく戦勝40周年記念メダルと、第1級、第2級大祖国戦争勲章が制定された。

旧参戦軍人はだいたい慎み深く、口数が少なかった。公の会見や取材記者のマイクの前はもちろんのこと、親しい友だち同士の間でも、戦争の話も、まして自分の戦功の話をするのはあまり好まなかった。言葉少なに前線の戦友について話すことが一番多かった。

西側のソビエト研究家は、ロシア人はもう済んだ大祖国戦争のことを話しすぎ、書きすぎると言っているが、自説の十分納得のいく説明はしていないし、できるはずがない。ことによると、わが国の〝事情通〟たちは、実在する確かな説明をわざと黙っているのだろうか。大祖国戦争に関係のあることがすべてソビエト人の心を揺さぶるのは、彼らが守ったのはただの祖国ではなくて、社会主義の祖国だったからなのだ。ヒトラー侵略軍との闘いはすべてのソビエト人の心を強く引きつけた。多くの民族から成るソビエト軍は一九一七年の10月革命が与えてくれた権利と自由を守って、勝利のために偉業をなしとげたのである。

ソビエト人が勝利に直接役立たないものはすべて後回しにして、どれだけの決意で戦ったかを物語る証拠はいくらでもある。彼らは勝利のためにあまりにも多くのものを捧げたのであり、そこに彼らの忘れがたい思い出の源があるのだ。わが国の主たる損失である二〇〇〇万人という数字に、息子を、父親を、娘を、夫を失った人たちの数を掛け合わすと、あの戦争で受けた心の傷跡がなぜいまなお疼くのか、分かるだろう。人種的優越と世界支配の思想にとりつかれた妄想患者どもが平和な国民に押しつけた戦争、止むをえずはじめた戦争で受けた心の傷なのだ。

戦勝40周年前夜の5月8日、クレムリンの大会宮殿で祝賀会が催され、ソ連共産党のM・S・ゴルバチョフ中央委書記長が演説して、勝利の意義と、平和の維持がいかに大切かということについて述べた。

「……われわれが、そしてわれわれの子どもや孫が平和と幸福のうちに暮らすことをめざして戦った幾百万の人々の期待は実現したのか？

もちろん、実現した！ しかし、いま生きているわれわれのためにも、将

来の世代のためにもわれわれの地球――人類の共通の家を大切にし、人々の生活から戦争をきっぱりと排除するためにまだまだ多くのことをやらねばならない」

ことしの春は遅れたが、5月9日にはあの記念すべき日とそっくり同じ明るい太陽をもたらしてくれた……赤の広場の祝賀パレードの先頭に軍旗をひるがえした旗手の縦隊が進んできた。私たちはいま再び、一九四五年4月30日午後9時50分ベルリンの国会議事堂の円屋根の上に二人のソビエト兵、ミハイル・エゴロフとメリトン・カンタリアが打ち立てた勝利の旗をこの目に見た。大祖国戦争のすべての方面軍の軍旗のあとから、特に精鋭な部隊の軍旗一五〇本が相次いで赤の広場の空にひるがえった。この一五〇本の軍旗は一九四五年6月24日、勝利のパレードに参加した将兵の手に掲げられて初めてこの広場を通ったのだった。旧参戦将兵の混成縦隊が通った。金星勲章が輝く正装姿のソ連邦英雄たち。栄誉勲章受章者たちの一隊。パルチザンや反ファシスト地下運動の参加者たち。チェコスロバキア、ポーランドからきた戦友たち。

祝賀パレードが終わると、モスクワ市民と賓客たちは都心のすべての通りと広場を埋めつくした。涙が出るほど感動的なこの日の特徴的な情景、それは、何十年も相見なかった人たちが抱き合う姿であり、白髪の婦人が無名戦士の墓の前に膝をついて祈る姿であり、モスクワ川の河岸通りに部隊名を書いた札をつけ、ブドウ酒を満たしたグラス、パン、魚、ソーセージなど簡単なオードブルなどを載せたテーブルがいくつも並んでいる光景であり、連隊番号、戦線の名、今日まで消息不明になっている父親の姓名を記したプラカードを掲げた若い人たちの姿だ。

5月9日を私は、戦時中無線技士や通訳をしていた女友だちと一緒に過ごした。私たちは長い行列に並んでクレムリンの城壁わきにある永遠の火の方へ歩いて行った。仲のよかった人たちの顔が記憶のなかに浮かびあがってきた。"指揮官"のパーベル・オブワロフ。私たちにパラシュート競技を教えてくれた人だ。成層圏からパラシュートで跳び降りるという夢をもっていた。戦闘機に乗って負傷し、やっとのことで飛行場まで機体を運んできたが、致命傷を受けていて死んだ。ハインリッヒ・ツァルトル。同じ無線技士学校で学んだオーストリア人、プロレタリア国際主義者で、音楽家であり、ロマンチストだった。いまはユーゴスラビアの山の中の、パルチザンの共同墓地に眠っている。リヤ・カントロビチ。モスクワ近郊で死んだ。同級生のグリゴリー・シムイロフスキー。文学者で、シェークスピアの研究家だった。ウクライナのパルチザン部隊に加わって戦い、ヒトラー・ドイツ軍との戦いで壮烈な戦死をとげた。

祝砲のとどろきが長く尾を引いて響き渡ったとき、私たちはレーニン丘にいた。その一瞬モスクワはしんと静まり返った。一発砲声がとどろく度に"ウラー"と子供の甲高い叫び声があがっただけであった。子供は実にたくさんいた。大人がみな、誕生日のように着飾った自分の子供を連れて家から戸外へ出てきたからだった。

戦争はあれから40年間なかった……一九四五年に人々が終わらせたあの戦争のような戦争も、それよりもっと恐ろしく絶望的な戦争――核戦争も絶対に起こさせないために、なんでもしなければならない。そのためにわが国は努力を惜しまない。広島の被爆40周年の記念日より少し前、わが国は今年8月6日から一九八五年いっぱいまでの間核実験を一切停止する義務を負った。このゴルバチョフ声明が出たとき、モスクワではちょうど第12回世界青年学生祭が行われていた。このソ連の新たな積極的提案を各国の青年代表たちがいかに熱狂して迎えたかは一見の価値があった。残念なことには、実際行為によってこの提案を支持できたはずの人たちは半歩も歩み寄りをしなかったのである……

だがそれでも理性は結局無分別に勝つはずだ。大人は子供たちの期待を実現しなければならない。


ソフィア・スサーニナ(若き日の筆者)


勝利に湧く1945年5月9日の赤の広場









1 グリゴリー・シムイロフスキー
2 パーベル・オブワロフ
3 リヤ・カントロビチ
4 ハインリッヒ・ツァルトル


モスクワのクレムリンの城壁わきにある無名戦士の墓

話題を拾う

アルバート通りの改装

モスクワ中央部の最も古い通りの一つアルバート通りの改装工事がこのほど終わった。この通りは今度から全区間が歩行者専用になった。アスファルト舗装は昔のような石畳に変わり、街灯も復古調になった。

各建物の一階を占める沢山の商店のウインドーの光が舗道にさし、落ち着いた雰囲気をかもし出している。

物見高い市民たちはこのまちの新しい雰囲気に早くなれようと見物に押しかけている。





タリンの煙突掃除人

エストニア共和国の首都タリンではセントラル・ヒーティングが広く普及しているが、旧市街ではまだ暖炉が使われていて、家々の屋根の煙突から煙が立ちのぼっている。当然そういう煙突は時々掃除をしなければならないから、この町では煙突掃除人という職業がまだ立派に成り立っている……

このほどタリン消防協会は代々煙突掃除人をしてきたキャゴ家の当主アンドレスに記念メダルを贈って、一家の功に報いた。キャゴ家では現在の三代目まで一五〇年も前からこの仕事を続けている。写真は仕事場のアンドレス・キャゴ。



アラタウの高山天文台

ザイリスキー・アラタウ支脈のアッスイ・ツルゲンスコエ台地に設置されたカザフ共和国科学アカデミー天文物理学研究所の高山観測所（写真）は、星雲物理学や惑星大気圏の組成に関するユニークなデータを提供している。

観測所は引き続き建設中で、海抜2750mの土地に1.5m反射望遠鏡が入るドームや実験室、宿泊所などの建物のほか、太陽熱利用システムが建設されている。

キシニョフの動物園



モルダビア共和国の首都キシニョフの子供たちは動物園が大好きで、いろいろな動物を見たり、案内人から動物の習性や性格を聞いたり、売店でアイスクリームをなめたり、さきごろアフリカから来た子象のビンボ（写真）と遊んだりして楽しんでいる。

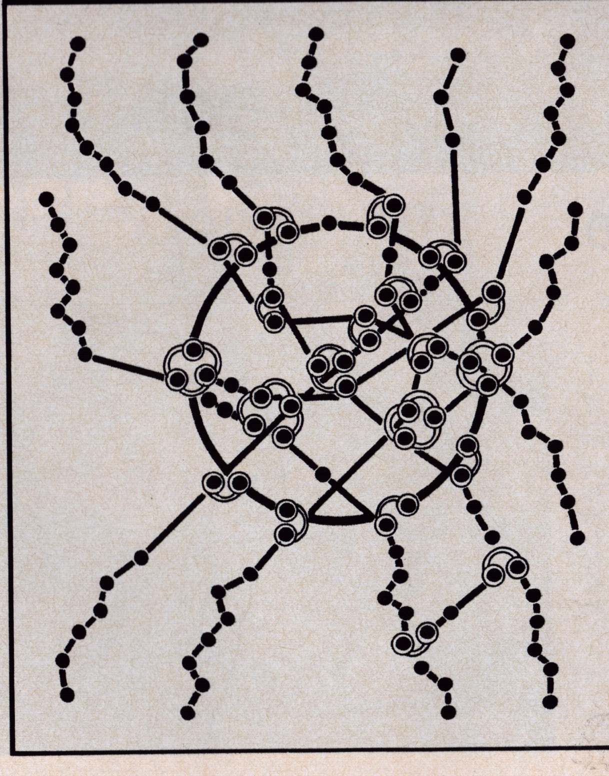
モスクワっ子が愛する地下鉄

カメラ　A・ルイスキン　V・パブロフ



地下鉄のマークはメトロの頭文字〝M〟

モスクワの地下鉄路線図

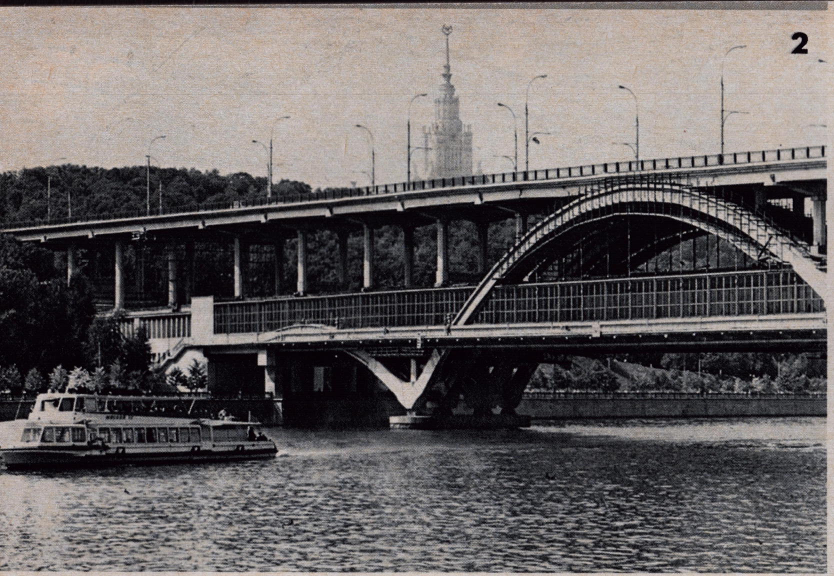


人口約900万を擁する世界有数の大都会モスクワは、都市の公共輸送の問題をうまく処理しており、多くの点で手本になれるだろう。バス、トロリーバス、市電、タクシーが毎日約1,000万人の乗客を運んでいる。タクシー以外の都市交通機関の運賃はどれも乗車距離に関係なく一律5コペイカ（約14円）である。

最も便利で市民に愛されている交通機関は地下鉄で、毎日約700万人に利用されている。

ずっと以前からモスクワの地下鉄の始発時刻は朝の6時きっかりと決まっていたものだ。ところが当節、地上の地下鉄駅の入り口に当駅の営業開始時刻は5時25分ですとか5時40分です、あるいはまた5時43分です、などと書かれた掲示が目につくようになった。別にだてに正確さを誇っているわけで





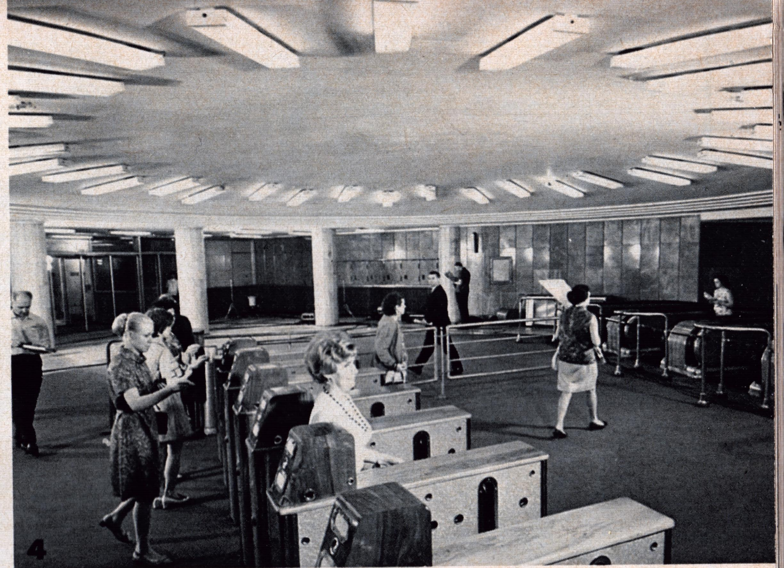
1　メドベトコボ駅の入口

2　レーニンスキエ・ゴールイ駅。モスクワ川に架かる橋の上に駅がある。

3　モスクワ中心部の古い地区にあるクロポトキン駅の地上の玄関。







4　いわゆる自動改札機。5コペイカ硬貨を入れると通れるようになっている。

5　レーニン図書館駅。地下鉄は便利な待ち合わせ場所だ。

6　地下鉄の車内







はない。これは乗客にとっても地下鉄にとっても得になることなのだ。一三二駅（モスクワの地下鉄の総延長は二一三㎞）から乗客が同時に始発時に出発できるようにするためには、列車は運行開始時刻より早く車庫を出なくてはならない。車庫から所定の駅まで列車を空で走らせるのはもったいないから、この始発列車のみすみす無駄になってしまう15－20分間を有効に利用しようというわけだ。その分だけ早く駅を開けることによって地下鉄は乗客が自動改札機に落とす運賃を余分にちょうだい出来る。

地下鉄はタクシーを除けばモスクワで唯一の採算の取れる公共輸送機関だ。最初の路線が開通した一九三五年以来運賃はずっと変わらず5コペイカという安さを維持しつづけ、現行営業路線の管理と新路線の建設費を完全にこの運賃収入だけでまかなっている。

地下鉄職員は約二万人。営業経費は年ごとに増えている。首都圏のニュータウンに伸びる路線は平均距離がどんどん長くなっており、これは地下鉄当局にとっては経費増となってはねか





7　一九七九年に営業を開始したゴーリキー駅

8　アルバート駅の構内

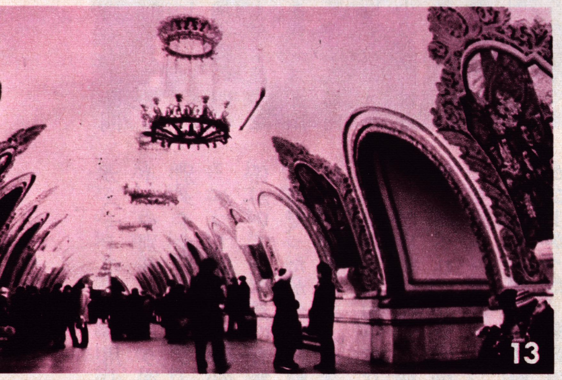
9　アルバート駅で久しぶりに出会った二人。

10　環状線のコムソモール駅のプラットホーム。A・シチューセフ設計。天井の鏡板の下図は有名な画家パーベル・コリンによる。この駅の営業開始は一九五二年。

えってきている。乗客の方はどの方向にどれだけ長い区間乗ろうと、また何回乗り換えようとも5コペイカの乗車料金を払えばいいだけだ。年間の乗客輸送量は延べ二五億人。モスクワの地下鉄は総延長では世界第5位なのに、輸送量ではトップの座を占めており、混雑のピークには地下鉄利用客は1時間当たり一〇〇万人に達する。8本の放射状路線と1本の環状線を1昼夜に



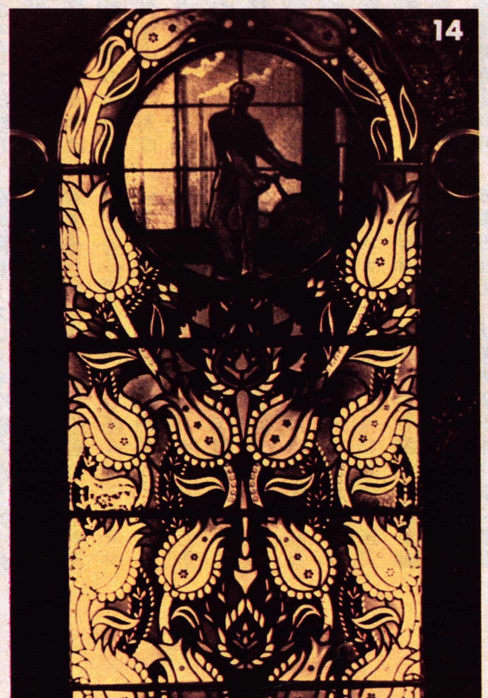
12



13



15



14

11　ニューヨークの万国博でグランプリをとったマヤコフスキー駅。

12　キエフ駅の構内を飾るモザイク画

13　環状線キエフ駅。1954年営業開始。プラットホームは貴石と色ガラスを使ったモザイク画18点で飾られている。モザイク画の作者はA・ミジン。テーマはロシア民族とウクライナ民族の友好。駅の設計者はE・カトニン、V・スクガレフ、G・ゴルベフ。

14　ノボスロボツカヤ駅の装飾画

15　アビアモトールナヤ駅の構内装飾（部分）



11





七〇〇〇本以上の列車が走る。1時間に約45本、80秒間隔で運行されており、頻度も世界最高を誇っている。

今仮りに、モスクワの地下鉄の四〇〇基ほどのエスカレーターを全部つなげると、この動く階段はエベレスト山を五つ重ねた高さになる。地下鉄構内の空気は1時間に3—4回完全に入れかえられる。換気坑は大小の公園付近の地表に導かれている。構内の壁という壁は最低月に一度、全表面を水で洗浄する。車両の清掃は（内も外も）毎日行われる。だからほこりだらけですすけた車両やホームに散らばった新聞やタバコの吸い殻にはお目にかかれない。

地下鉄には平日ダイヤのほかに、大きなスポーツ競技会や児童新年ヨールカ（モミの木）祭用の特別ダイヤ、スキーや別荘へ向かう客をさばく休日特別ダイヤも組まれる。

かつては地下鉄駅の入り口には改札係がいて乗車券の有無をチェックしたものだったが今は自動改札機がその役目をし、5コペイカ硬貨を入れるとバーが開く仕組みになっている。それぞれの自動改札機にたまった乗車賃の額を調べれば、乗客がどの改札機を好んで使うかが分かる。こうして比較してみたら人間の心理のおもしろさが浮かび上がった。乗客が好んで使うのは入口に一番近い方ではなくその隣の自動改札機で、最も使われないのは入口から一番離れた改札機ではなく、その一つ手前の改札機だった。

自動改札機や自動両替機には時々一九六一年の通貨改革以後使われなくなった古い硬貨が入っていることがある。また時には外国通貨も見つかる。これは多分、外国人の観光客が好奇心から試してみるのであろうが、当然自動両替機は交換レートを知らないから、いつものように硬貨を重さで判断する。だから両替されて出てくる小銭は実際の額より少ないかも知れないし、多いかも知れない。こうして損得は月に10—15ルーブルになる。

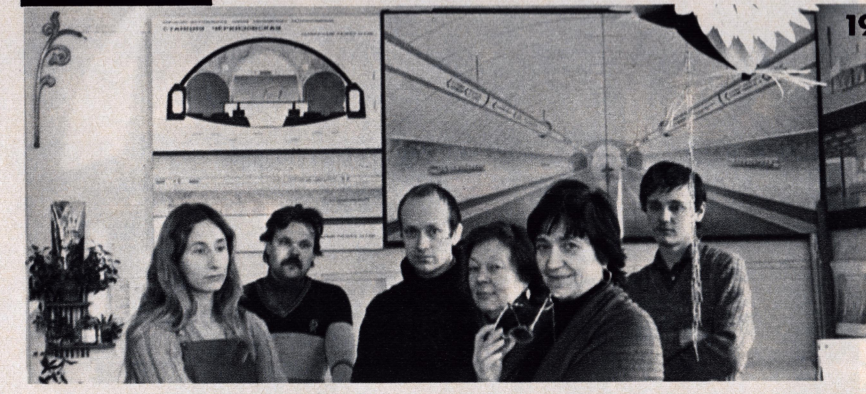
地下鉄内で医者の助けが求められる件数は1年間に七万件以上もある。駅には医務員が詰めている。補助医のゾーヤ・マルティノワはある時などお産に立ち会わされてしまった。ゾーヤが取り上げて、男の赤ちゃんがこの世に誕生した。地下鉄のソーコル駅で生まれた赤ちゃんは間もなく正真正銘の"この世"——地上に出て行った。

巨大で複雑なモスクワの地下鉄の運営にはコンピューターが使われている。コンピューターは運行条件を決め、列車と列車の必要な間隔を維持し、速度を計算し、ブレーキ作動のきっかけを選び、列車のドアの開閉をコントロールする。多くの路線で運転士は今や昔のように2人一組ではなく、コンピューターと一組で働いている。電力供給も自動的に行われ、多くの駅で空気供給装置が自動的に作動している。

将来、地下鉄の自動制御システムが導入される。すべてが乗客の流れにもとづいて行われる。駅の入口に設置されたセンサーが信号を送ってよこすと、自動制御システムがすぐさま必要な動作をてきぱきと指示する。にわかに雨が降り出し、大勢の人が地下鉄に殺到したとしよう。自動制御システムが直ちに作動して空気の供給量を増やし、止まっていた予備のエスカレーターも動員し、列車の運行間隔を短縮させる。自動制御システムの助けを借りて専門家はラッシュアワー時の列車の運行間隔を80秒から75秒に短縮し、運行速度を上げる（現行の運行速度は時速41km



19 メトロギプロトランス研究所の職員たち。モスクワの新興団地に近く建設される地下鉄駅のデザインを決める。



16 イズマイロボの電車庫

17 地下鉄構内の空気の清浄度を調べる微気候研究所の職員（プロフソユーズ駅で）

18 地下鉄工事現場

で、区間によっては最高90km）。

だが自動化は責任の重い仕事の負担を減らしながら、それと引き替えにマイナスの面も持ち合わせている——運転士の仕事が単調になり、反応の鋭敏さが損なわれる。これは危険だ。そのために運転士が連続して運転できるのは2時間半までと規制されている。時間が来ると選手交代だ。労働時間に算定されている交替した後の30分間に運転士は緊張をほぐしたり、ビュッフェや休けい室に行ったり、地上に上がったりして次の乗車勤務に備える。

手厚い福祉と特典（高賃金、一般職だと男子の年金生活入りは60歳だがこの場合は55歳、地下鉄のフリーパスに加えて2年に1度はソ連国内のあらゆる地点までの鉄道の往復切符が無料で支給されることなど）にもかかわらず、運転士は不足している。地下鉄内にはいかなるポスターも広告も貼ってはならないことになっているが、これだけは例外で、運転士募集のビラが目につく。希望者は運転士養成のための講習が受けられる。

この地下鉄職員募集の広告ビラには少なくとも10種類以上の職種が挙げられており、どれも特典と優先権が約束されている。地下鉄はソ連経済の他の部門と同じように慢性的に労働力が不足している。現行5カ年計画中にモスクワの地下鉄路線は約30km延びたが、それでも新興団地まではカバーしきれていない。地下鉄建設局の最終目標は地下鉄網を拡充し、地下鉄駅がどの家からも1—2kmの範囲に散在するようにすることだが、これは現在の地下鉄網を約2倍に拡充することを意味している。

さてこうして、新路線を建設し、列車の収容能力を増やし、運行頻度を高めなければならないのだが、そのほか土圧や水圧、酸化過程、温度変化、漏電のチェックがあり、これは定期的に行わなくてはならない。構内の天井から静かにぶら下がっているシャンデリアや標示灯も危険物だ。最低3カ月に1度はしっかり固定されているかどうか検査される。

現在地下鉄はソ連国内9都市にある。モスクワの地下鉄建設者はどの都市の地下鉄建設にあたっても支援者であり、助言者であった。モスクワの地下鉄建設の経験はプラハ、ワルシャワ、ソフィア、カルカッタの地下鉄にも生かされた。これらの地下鉄は美しさ、運行時刻の正確さ、快適さの点でモスクワの地下鉄と肩を並べていると言えよう。

☆　☆　☆



レオニード・ズベルコフスキー・ソ連内務省国家自動車監督局長

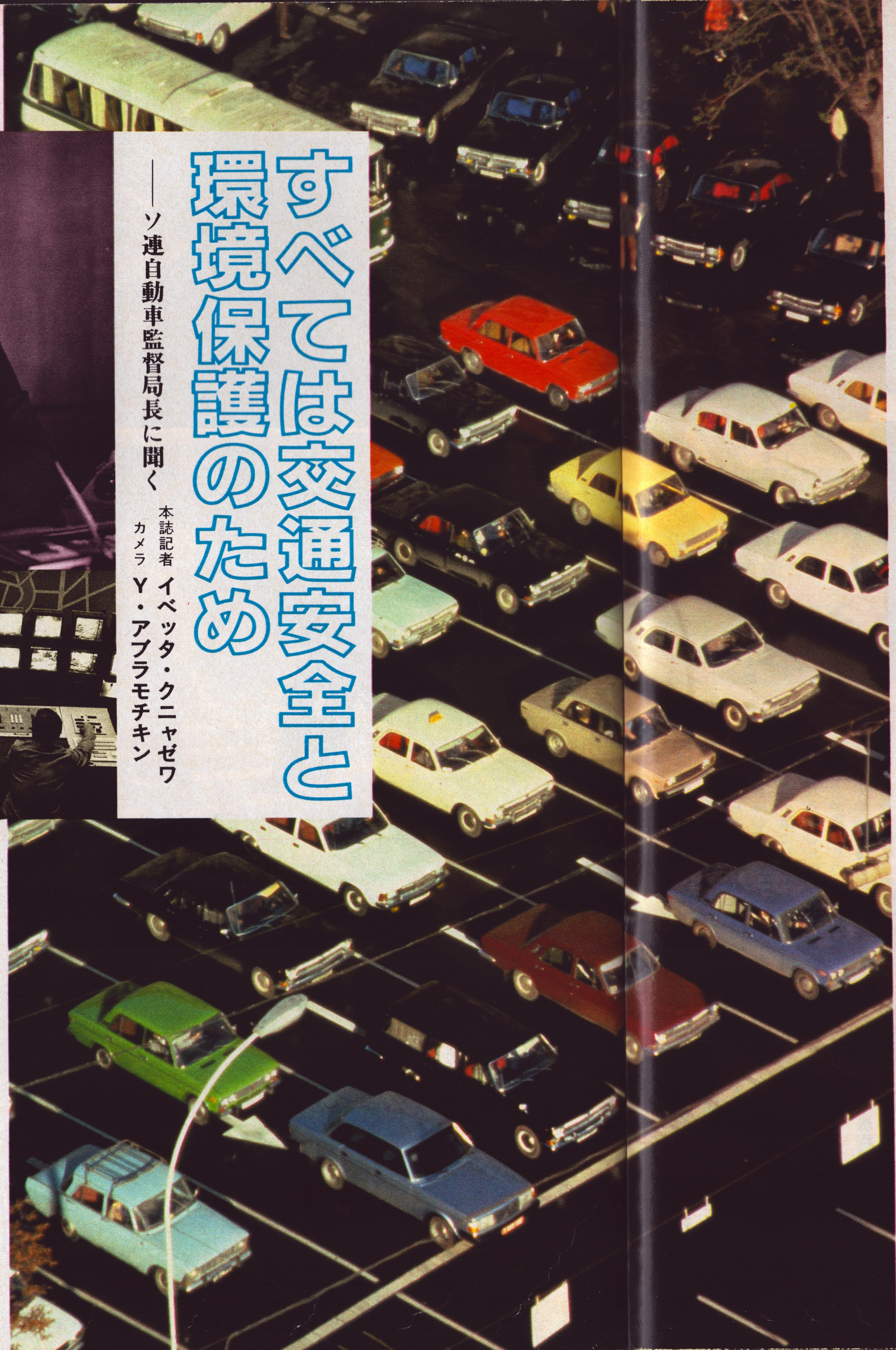
すべては交通安全と環境保護のため

――ソ連自動車監督局長に聞く

本誌記者 イベッタ・クニャゼワ
カメラ Y・アブラモチキン



モスクワ市内の道路状況を監視する中央モニター室



▶ソ連でもモータリゼーションはさまざまな問題を生み出している

取り締まりは厳しすぎる?

自動車があるところには必ず交通監督官もいる。用がないかぎり、この人たちにはかかわらない方がいい。交通監督官に停車を命じられるのを待つま



歩行者もまた道路交通の一部



ミンスク街道からモスクワ市内に入るインターチェンジ



排気ガスの成分濃度を調べる交通監督官



◀「道路は散歩する場所じゃないんだよ」

経済相互援助会議（コメコン）ビル前の駐車場





こういう歩行者には交通監督官は特別サービスをする

でもなく、私はこちらから、わが国最高の道路交通監督機関――ソ連内務省国家自動車監督局（GAI＝ガイ）へ出向き、レオニード・ズベルコフスキー局長・民警将官（55歳）に面会を申し入れた。局長は愛想のいい、よく気がつく、話上手な人物だった。

「モスクワのGAIはとても厳しいと思いませんか？」と私は切り出した。

「何かトラブルがあったようですね？」と局長は同情するように言った。

「厳しいのはGAIではなく、道路の過密ですよ」

「もちろん、道路では何が起きるか分かりませんが……」

「〝素人〟にとってはそうでしょう」と、相変わらず愛想笑いをしながら局長は言う。「〝素人〟の歩行者、〝素人〟のドライバーにとって、自動車ブームは大変危険です。交通監督官はこのような素人から他の人々を守っているだけでなく、素人自身を守ってやっているのです。交通監督官の行動は、路上における権利と義務をはっきり示した法律によって厳密に決められています」

「法律は私も知っています。ささいな理由で（たとえばライトをつけていなかったとか）停車を命じ、よくてお説教、悪くすると罰金……」

「場合によっては裁判にもかけますよ。しかし、GAIには権利よりも義務の方がはるかに多いのです。交通法規の試験をやることから、道路の建設・改修計画の鑑定まで。この〝から〟と〝まで〟の間に、交通整理や規制、道路の監視、自家用車から公用車まで、すべての自動車の整備状態のチェック等、やらなければならない仕事が山ほどあります。GAIの職員は、交通事故の現場では緊急の行動を取らなければなりません。必要なら応急手当を施し、救急車を呼び、違反者を拘束し、目撃者を確かめる、といった具合です。それだけではありません。言ってみれば、交通監督官は道路上のトラブルのすべてに関係します。というのも、GAIはソビエト民警の一部であり、ソ連内務省のシステム内で活動しているからです」

「ソ連の交通法規と国際交通法規には違いがあるのですか？」

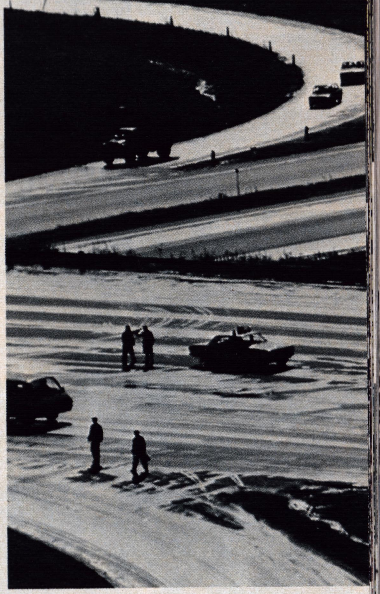
「実質的にはありません。わが国の基本法――ソ連道路交通法は、ソ連最高会議幹部会によって批准された一九六八年の道路交通条約に完全に一致するもので、道路標識や信号は、やはりわが国が批准した道路標識および信号に関する条約に一致しています」

「それでは外国のドライバーも、わが国では安心して運転できるというわけですね？」

「と思います。もちろん、違反をしなければ、ですがね」



◀交通監視にはヘリコプターも欠かせない



交通監視の仕事は時間や天候を問わない

「違反したら？」

「わが国のドライバーと同じ扱いを受けます。ソ連の法律は外国人や無国籍者に対して"内国民待遇"を適用します。つまり、ソ連国内では外国人もソ連人と同じ権利と義務を持つのです。世界中どこでもそうですが、外交特権を持つ人は例外です」

「しかし、交通監督官に停車を命じられれば、だれだって、何か違反を犯したかな、と不安を覚え、エンジンを切って、車から降りて……」

ズベルコフスキー局長は非難するように首を振った。



「それでも構いませんが、賢明なやり方ではありません。規則によれば、監督官の方があなたのところへ来て、身分を明かし、呼び止めた理由を説明しなければなりません。法はトラブルの処理法を定めており、父親または母親の権威を損なわないために、交通監督官は子どものいるところではドライバーの違反内容を告げてはならない、とさえ定めています」

「それでも、ドライバーの立場は弱いのではないでしょうか？　事故を起こしたわけでもなく、犠牲者が出たわけでもなく、ドライバーは違反を犯したとも思っていないし、監督官の指摘も納得できない。それでも罰金を科せられることがあるのですか？」

「あります。ただし3ルーブルを超えることはありません。他のすべての場合にも調書が作成され、罰金の件はGAIの地区分局で審査されます。ついでながら、ソ連では罰金は最高額でさえ、モータリゼーションが発達した他の国に比べればはるかに低いと言えます。なぜならわが国では、法律違反にさいして重要なのは、罰の厳しさそのものではなく、罰はやむを得ない措置だと考えられているからです。ところで、交通監督官の指摘が納得できなければ異議を申し立てればいいのです。法律もそう定めています」

「それは知っています。しかし勝ち目はあるのですか？」

「あなたの方が正しいのなら、どうして勝たないことがあるでしょう？　ただ、そのようなトラブルの場合、真理は往々にして監督官の側にある、ということも指摘しておきましょう。監督官の方が道路状況全体をより正しく見ており、何よりもまず安全を重視しているからです」



違反を発見し停車を命じる交通監督官

右下　事故発生。ただちに現場についたパトロール隊員の仕事は、状況を分析し、違反の有無、責任の重さを調べること。

交通事故との闘い

話はちょっとそれるが……

細かい経緯は忘れられてしまったが、事件そのものは現在に至るまで詳しく伝わっている。一八九六年8月17日、月曜日のことだった。英国のブリジット・ドリスコルス夫人は劇場へ出かけた。ロンドン近郊の小さな町での話である。友人との話に夢中になっていた夫人は「馬なし馬車に注意」の立て札に気がつかなかった。夫人は時速4マイルで走って来た自動車に轢かれ、世界で最初の自動車事故犠牲者になった。

これを笑ったら、不謹慎というものだ。かわいそうなドリスコルス夫人は今世紀の七〇年代だけでも二五〇万人の死者を出した自動車事故の歴史の幕開けを告げることになった。負傷者数はこの10倍を下らないだろう。

だから、モスクワの主要な交通問題は何か、という私の問いに、ズベルコフスキー局長が「犠牲者です」と答えたのも当然だ。

「犠牲者は多いのですか？」

「たとえ一人でも、私は多いと思うでしょう。生命が無意味に滅びることが、すでにあってはならないことなのです。世界の大都市に比べれば、モスクワはまだましな方です。この5年間に車一〇〇〇台当たりの事故件数は2/3に減りましたが、それでも安心できません」

「事故に遭うのが最も多いのはどんな人ですか？」

「"素人"のことはすでに言いましたが、交通事故の60％はオーナー・ドライバーによるものです。理由は明白です。近年、わが国では自動車の生産台数と保有台数が激増しました。だから、多くのドライバーは新米です。もちろん、彼らは自動車学校で運転を習い、試験に合格し、厳しい医療チェックを受けてはいますが、経験が足りません。いまではハンドルを握る若い人も多くなりましたが、25歳以下の若い人は



子どもたちに交通規則を教えるのもGAIの仕事

エネルギッシュで、自信が強く、自分の経験や技術を過大評価する傾向があります。交通違反の40%はこうした若者によるものです。同じ年齢の女性がまさに模範ドライバーだということは注目に値します。また、アルコールの愛好者も大きな脅威であることは、言うまでもありません。交通事故の$\frac{1}{3}$ないし$\frac{1}{4}$は飲酒運転によるものです」

「交通法では飲酒運転は厳しく禁じられているはずですが」

「もちろんです。多くの外国ではビールやワインを1杯ぐらい飲んだところで、酔っ払い運転とは見なされません。罰は血液中のアルコール濃度によって決まります。わが国では厳格で、まさに"飲んだら乗るな！"です。わずかなアルコールでも正常な反射運動を妨げることは、科学によって証明されています」

「GAIはそのような人々を罰する以外に、事故防止のためにどんな措置を講じていますか？」

「その質問を待っていました。われわれは予防こそ、交通違反も含めたあらゆる法律違反との闘いの主要な方向だと考えています。飲酒運転者に対しては、GAIは厳しい罰——高額の罰金や免許停止——を科します。仕方がありません。死と隣り合わせなのですから。オーナー・ドライバーの場合はもう少しやっかいです。彼らを"コントロール"できるのは、良心、義務、賢い奥さんだけです。国営交通機関の運転手は出発前に、医師によって、アルコールだけでなく、すべての項目をチェックされます。メカの仕業点検は言うまでもありません。GAIの監督官は、整備不良車は車庫から出させない権利があります。この権利をときどき使わなければならないのは残念ですが……

もちろん、われわれは教育的な措置を大いに信用しています。あなたは監督官の話を"お説教"と言いましたが、お説教されないこと、子どものときから交通法規を知り、それを守ることが必要です。いま多くの幼稚園で子どもの遊びの中に道路交通法を取り入れています。もう少し大きい子どもには学校でそれを教えます。全国民的ゲーム"スベトフォル（信号灯）"というのさえあって、約三〇〇万人の少年少女がこれに参加しています。また、GAIは数種類の雑誌を発行し、テレビやラジオに番組を持っており、新聞に論文を寄せています。われわれの仕事についても新聞で取り上げられます。こうした広報活動は、学者、社会学者、人気映画俳優などが協力してくれます」

ズベルコフスキー局長が話している間、私は道路状況や運転に及ぼす天気の影響を知るために、車の中でいつも超短波で"道路情報"を聴いていることを思い出した。モスクワでは、特に積雪やアイスバーンの季節には、この情報は非常に役に立つ。

私にはもう一つ、GAIの局長と話し合いたい問題があった。

「ときどき、特に急いでいるとき、交通監督官が停車を命じて、計器を使ってエンジンの調子を調べますが、毎年の車検のさいも、GAIの係官はキャブレターの整備不良や二酸化炭素について口うるさく言いますね……」



未来のドライバーの試験風景。機械による判定は公平だ。

「気を悪くしないで下さい。私たちが自動車大国の悲しむべき経験をタイミングよく教えたおかげで、モスクワはいま大気汚染に悩まずにすんでいるのです。GAIは道路上でこの問題を厳しく監視し、整備の悪い車を運転している不注意なオーナー・ドライバーだけでなく、整備不良の車を走らせている企業の指導者にも罰金を科します。わが国の排気ガスの有害物質の許容基準は欧州諸国に比べて厳しく、たとえば、一酸化炭素の許容基準は欧州諸国の$\frac{1}{3}$です」

「将来、モスクワの道路はどうなるでしょうか？　われわれは自動車なしにはやって行かれないでしょうか？」

「やって行かれません。自動車は増えこそすれ、減ることはないでしょう。しかし、自動車も環境に害を与えないものに変わります。モスクワではすでに一〇〇台の電気自動車が走っており、学校給食や小荷物を運んでいます。自家用車がモスクワの公共交通機関を圧迫することはないと思います。それらはうまく共存するでしょう。歩行者専用の道路も増えるでしょう。交通事故が一掃されるときが来ることを私は願っています」



"白バイ"隊員A・ラプシン

〝漁業協力にはまだ大きな余地がある〟

——来日したカメンツェフ・ソ連漁業相にインタビュー



日本外務省に安倍外相を訪問したカメンツェフ漁業相（11月13日）（写真提供＝共同通信）

V・M・カメンツェフ・ソ連漁業相（57歳）を団長とするソ連代表団が、11月13日から19日まで日本を公式訪問した。帰国に先立ちカメンツェフ漁業相は訪日の印象について、M・エフィーモフ本誌記者に次のように語った。

こんどの訪日は日本外務省の招待によるもので、わが代表団は安倍外相と会談し、佐藤農水相と2回にわたって協議した。またわれわれは三重県と奈良県を視察した。滞在スケジュールには、日本社会党の石橋政嗣委員長、日ソ友好議員連盟の櫻内義雄会長らを含む著名な政治家との会談が盛り込まれていた。

こんどの訪日の主な目的は、ソ日両国にとって大きな意義を持つソ日漁業協力の成果を討議することであった。ソ連と日本は世界の主要漁業国であり、ソ日両国の漁民は世界の同じ水域で操業し、同じ資源を利用している。だから両国は水産資源の維持と利用に特別な責任を負っている。

まもなく30周年を迎えるソ日漁業協力は、時の流れと多くの試練によって点検された。協力が始まったのは二〇〇カイリ宣言前であり、国連海洋法会議中も協力は続いた。私はこの会議に代表団の一員として出席した。あの会議で若干の国の代表は二〇〇カイリ水域を厳しく設定し、誰も水域内に入れないよう提案した。当時われわれはこう主張した——二〇〇カイリ水域を定めることができるし、この水域への外国漁船の立ち入りを禁止することさえできる。だがある水域から他の水域へ魚が自由に移動するのを禁止することはできない、と。それはつまり二〇〇カイリの垣根を設けてもだめで、逆に国際協力を発展させなければならないことを意味している。ソ日両国の経験はそのよい手本である。

ソ日両国は漁業関係の六つの政府間協定と四つの官庁間協定を通じて結びついている。われわれは日本の多数の会社とも協力し合っており、接触は多面にわたっている。

しかしわれわれ両国の漁業関係は万事がうまくいっているわけではないし、すべての問題がたやすく簡単に片付いたわけではない。われわれは激論を交わしたり、討議に討議を重ねたりした。しかし肝心なのは（この点もとくに強調しておきたいのだが）、どんな難問題でもみな解決されており、未解決のままになった問題は一つもなかったということである。われわれはいつもとどのつまりは合意に達することができた。

われわれの協力関係は、両国を結ぶ橋または糸のようなものだと言えよう。時たまこの橋は落ちそうになったり、糸も時々ぎりぎりのところまで延び切ることがあるが、橋は以前のとおり架かっているし、糸も一度も切れたことがない。これはソ日漁民の大きな功績である。

双方は交渉の場にのぞむさい、つねに必ず妥協点を見出すことを主な課題としてきた。これは非常に大事なことであり、われわれがつねに、双方を結合するものを探し、双方を引き離すものはわきによけたということだ。

われわれは日本とその国民を非常に尊敬している。われわれは日本と真に善隣的な関係を持ちたいと思っている。だから私は、漁業における両国の協力にはまだ大きな余地があり、いっそう発展する見通しがあると考えている。いままでに達成されたものが限界ではない。



会談を前に握手を交わすカメンツェフ漁業相と佐藤農水相（11月14日）（写真提供＝共同通信）

われわれは実際に多くのことに取りかかる用意がある。たとえば、先ごろ日本側はスケトウダラのすり身を生産する共同企業をサハリンに作ることを提案した。これはかなり興味深い提案で、研究に値すると思う。わが方はすり身の種類を拡大し、イワシやアジですり身を生産することを提案した。要するに、これは両国の協力を拡大する可能性があることを示す小さな例にすぎない。

公海上でのサケマス漁の非常にむずかしい問題について少し触れたい。数十万人の日本の漁民の運命に直接かかわるこの問題がいかに真剣に論議されているかを私は知っている。この問題はしばしば、ソ日関係のレベルあるいは第三国の影響と結びつけられる。われわれはそのようなアプローチをしていない。われわれはただ一つの原則——大西洋のノルウェー・ニシン（ヘリング）を絶滅に追いやってしまったように、サケマス類を絶滅させてはいけない、ということから出発している。われわれは、わが国の漁民には公海上でのサケマス漁を禁止した。だが日本の漁民の要望と彼らが直面している困難を考慮して、日本のために一定量を割り当てることにした。しかし、この問題はつねに厳しくコントロールし、科学的なデータを綿密に追求しなければならない。なぜなら、学者たちのシグナルを無視すれば、不幸が襲うかもしれず、そうなったらもう手遅れだからだ。



帰国を前にして記者会見するカメンツェフ漁業相（11月18日、日本記者クラブ）

いまわが国民は「一九八六—一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」（草案）の審議に取りかかった。基本方向は公海の生物資源の調査と開発を強化することも予定している。

最後に、今回の日本訪問（2回目）の結果に私が非常に満足していることを強調しておきたい。われわれは今後も大臣同士の会談を組織し、両国の漁業協力の問題を審議するというこのよい伝統を続けるつもりである。

第1次ロシア革命（一九〇五年）80周年

12月武装蜂起最後のとりで プレスニャ

本誌記者 パーベル・シャリコフ



1905年12月武装蜂起（モスクワ）の際の労働者戦闘隊とツァーの軍隊、警察隊との戦闘（「クラスナヤ・プレスニャ」博物館のジオラマから）

いまから80年前の一九〇五年12月7日、第1次ロシア革命（その年の2月）の過程で生まれた人民の権力機関であるモスクワ労働者ソビエトの決定にしたがって、モスクワ市のプロレタリアートの政治的ゼネストが宣言された。皇帝の政府はストに入った労働者の弾圧に精鋭部隊を差し向け、ゼネストは武装蜂起に生まれ変わった。この武装蜂起の中心となったのが、モスクワの労働者地区であるプレスニャだった。

ボリシェビキは民衆に檄を飛ばした——「革命的プロレタリアートはツァー政府による愚弄と犯罪行為にこれ以上我慢できず、これに断固とした容赦のない戦いを宣言する。ロシアの全将来——生か死か、自由か隷属かという問題が賭けられている。労働者階級はその力を力強く爆発させて、長年にわたる暴力と専横の打倒をめざしている。この偉大な瞬間にあたり、胸にプロレタリアの心臓が脈打っている者は皆、闘争に立ち上がらねばならない！」

モスクワ市内の通りという通り、広場という広場にバリケードが築かれ、労働者の戦闘隊と皇帝の軍隊、警官隊との間に随処で血なまぐさい戦闘が繰り広げられた。一番激戦が行われたのはプレスニャ地区であった。この地区は蜂起の中心だった。ここではボリシェビキの指導下に労働者の最精鋭戦闘隊が戦った。動物園そばとか、モスクワ川にかかった大プレスニャ橋のたもとなどで、当時市内で一番大きな紡績企業だったトリョフゴールナヤ工場とその付近の大小工場の労働者戦闘隊がバリケードに拠って英雄的に戦った。労働者たちはクドリンスカヤ広場（現在の蜂起広場）から進んできた皇帝の兵士や竜騎兵の猛攻を何回も撃退した。またシュミット家具工場の労働者の戦闘隊はゴルバーティ橋のたもとのバリケードに拠って、サドーワヤ通りからこの地点へ突破しようとした軍隊の進路をさえぎって、英雄的に戦った。

プレスニャ地区は砲撃にさらされた。煙と灰が黒雲のように立ち昇って、モスクワの上空に漂った。プレスニャ地区の戦闘は9日間続いた。プレスニャは文字どおり軍営と化した。地区の全権力は蜂起した人民の手に握られ、バリケードの上に革命の象徴である赤旗がひるがえっていた。セミョーノフ、イワノフ両近衛連隊の装備の優秀な精鋭部隊の力を借りてモスクワ市の他の地区の蜂起は鎮圧されてしまったが、プレスニャ地区のみは頑として降伏しなかった。

12月16日から17日にかけての夜は戦闘隊の労働者は一睡もしなかった。彼らは最後の決戦が迫っていることを承知していた。モスクワ蜂起の最後のとりでを制圧できないことに激怒した将軍たちは、砲火でプレスニャを焼き払い、蜂起参加者を容赦なく撃滅せよとの命令を下した。

午前4時殷々たる砲声でモスクワは眠りを醒まされた。

家屋が音をたてて崩れ、その廃墟のなかで女や年寄りや子供が死んだ。木造家屋ばかりの区画がまるごと砲火に吹き飛ばされた。何百人もの人々が住む家を失った。民衆に対するこの残忍な制裁は、蜂起した労働者たちの専制政治への憎しみをさらにかきたてた。労働者戦闘隊員たちは終日命を惜しまず戦い、ツァーの懲罰隊の攻撃を何回も撃退した。

だが、あまりにも力の差は大きかった。プレスニャの労働者戦闘隊司令部は蜂起を整然と停止する決定を下した……

12月武装蜂起は敗北したが、モスクワのプロレタリアート、なかでもプレスニャ地区の労働者たちの英雄的な闘いぶりは永久にソ連国民の記憶に残ることになった。プレスニャ地区はこの地区を防衛した人々の革命の旗の色を記念し、またここで流された労働者たちとその家族の血の色を記念していまではクラスナヤ（赤い）プレスニャ区と呼ばれている。

いまクラスナヤ・プレスニャ区は全体が壮大な記念碑のようなものである。この区の通り、広場、工場、地下鉄の駅、中学校、文化宮殿の名はあのときの革命的事件からとった名前であり、自由のために戦った人々の名前を国民に思い出させるよすがになっている。蜂起広場、バリケード通り、マンツーリン工場、シュミット横町、クラスナ

ヤ・プレスニャ通りといった具合だ。どこを見ても思わず一九〇五年の12月に思いを馳せるものばかりである。

歳月には勝てない。一九〇五年のバリケード戦に加わった者はもうひとりもこの世にはいない。けれども人々は彼らを記憶し、彼らのことを知っている。クラスナヤ・プレスニャ区の人々は写真、命令書、檄文、新聞、ビラ、銃の見本、手紙、当時の事件の参加者や目撃者の回想記などの資料を熱心に収集し保存してきた。これらの資料はクラスナヤ・プレスニャ博物館や区内の企業の付属博物館に展示されている。

いま、蜂起の当時の様子を知るうえで非常に参考になるのが、蜂起に加わった革命家たちの子供や孫たちの談話である。そのうちの二人と会ったときのことを話そう。

父親の名が付いた通り

クラスナヤ・プレスニャ区の通りの一本は労働者ミハイル・ニコラエフの名が付いている。彼のことを話してくれたのは息子のアレクサンドル・ニコラエフだ。ミハイルは若くして職業的革命家の道に入り、党が創立された年（一八九八年）に入党して以来党が課した任務にしたがって、モスクワ、同市近郊のムイチシチ地区、ウクライナのオデッサ、ハリコフ両市などで労働者のなかに入って活動した。一九〇五年の初めにはシュミット家具工場に就職して工場内に労働者の戦闘隊をつくれという任務を受けた。この課題を彼は見事に果たした。ミハイル・ニコラエフを助けたのは、意外にも工場主のニコライ・シュミットだった。シュミットはプロレタリアートの側に移りその思想を受けいれたブルジョアの一人だった。先回りして話すと、モスクワ蜂起が鎮圧されてからシュミットは逮捕され、投獄されてひどい目に会った。死の直前彼は遺言して財産をボリシェビキの党に贈った。このような人物がミハイル・ニコラエフの革命闘争の戦友となったのである。シュミットがくれた金でニコラエフは銃や弾薬を買い、シュミット工場の労働者戦闘隊は恐るべき勢力になった。一九〇五年の12月この戦闘隊は主立った戦線で戦い、11の警察署を武装解除した。

蜂起が鎮圧されるやミハイル・ニコラエフは身を隠し、長いあいだ非合法生活を送った。それでも警察は遂に彼の行方を突きとめた。彼は逮捕されて裁判にかけられ、絞首刑の判決を受けたが、後に永久流刑に減刑されて（家族とともに）シベリアの僻地へ送られた。

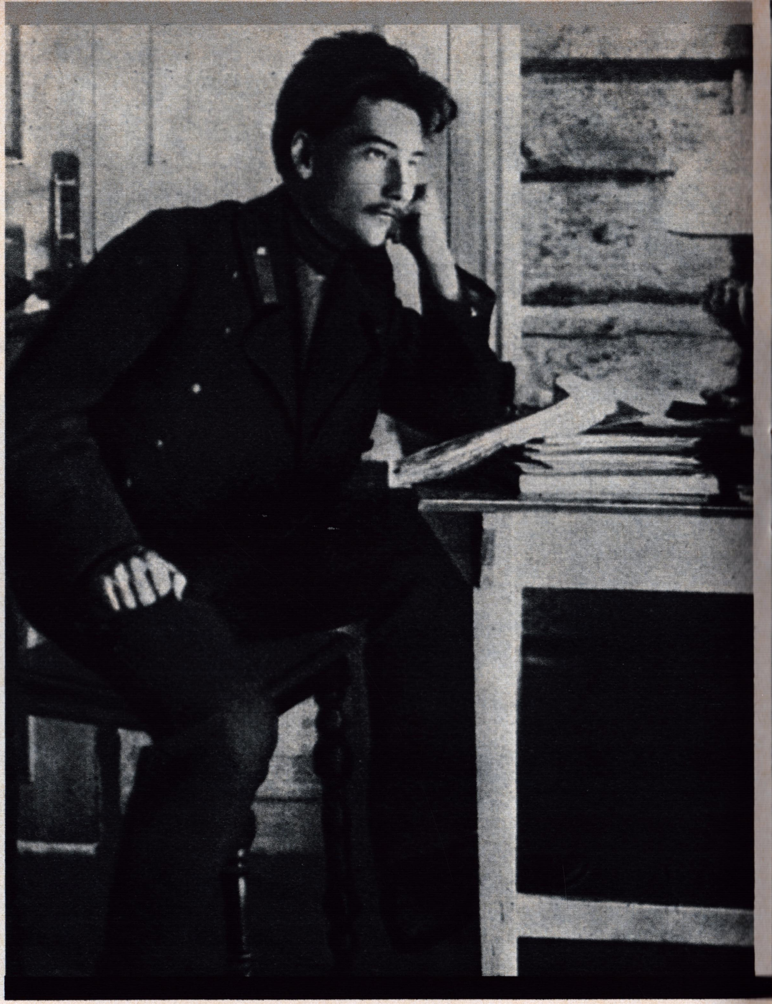
息子のアレクサンドル・ニコラエフの談。

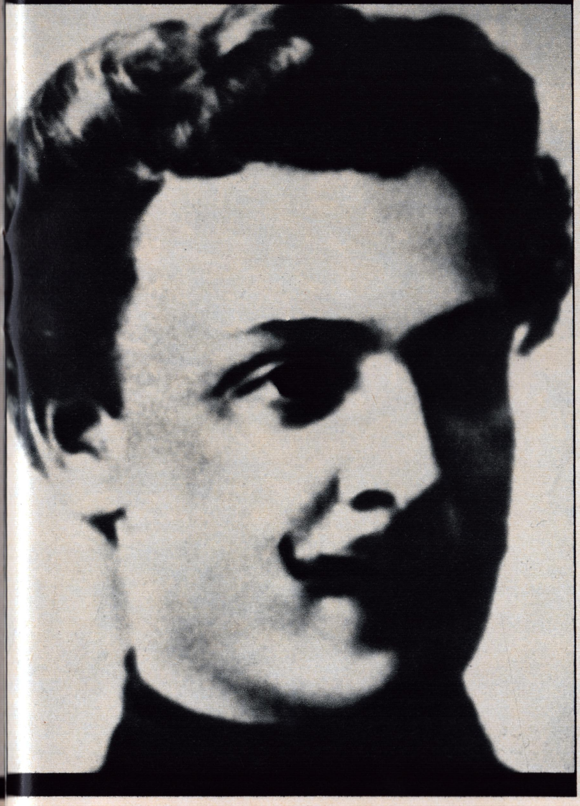
「憲兵が足かせをかけた父をシベリアへ護送して行った時のことを覚えています。母と私が同行しました。父は歩くのがやっとでしたが、気力は失っていなかった。あるとき休止時間中に父は私の頭を撫でて〈坊や、気を落としてはいけないよ。もうすぐお父さんたちが勝つんだ。勝つことになっているのだよ〉と言いました」

父が示した手本は息子の一生を決めた。アレクサンドルは成人するや共産党員となり、父親とともに一九一七年の10月革命に参加して、国内戦で転戦して革命の成果を守った。平和が戻ると、彼はシベリア、極東で工場の建設にたずさわった。ヒトラー・ドイツとの大祖国戦争のときも出征した。

革命と、革命の成果の防衛はニコラエフ一家の仕事になった、と言っても言い過ぎではない。高齢になった今でも（アレクサンドル・ニコラエフは85歳となった）その生活は活気にあふれている。記者たちが家を訪ねたとき、彼は父親の名を冠した中学校から戻ってきたばかりで興奮していた。

「あの子供たちは大したものですよ。知識欲にあふれている。私の父親はどんな本を読んでいたとか、レーニンを見たことがあるかとか、私を質問攻め





◀労働者の武装蜂起を積極的に支援した学生の工場主ニコライ・シュミット（1883—1907）

▼プレスニャ地区で武装蜂起を準備した革命家ミハイル・ニコラエフ



現在のモスクワのクラスナヤ・プレスニャ区

にしましてね」
ついでにいうと、父ミハイル・ニコラエフは実際にレーニンと会ったことがある。一九〇五年10月ペテルブルグ（現在のレニングラード）のブイボルグ地区のある労働者の会合で会ったのだった。ミハイルはレーニンのはなむけの言葉に送られてバリケード戦におもむいた、と言えないこともない。

トリョフゴールナヤの労働者たち

一九〇五年12月にアレクサンドル・ニコラエフの年齢はわずか5歳だったが、イワン・クルイロフは7歳だった。





右　クラスナヤ・プレスニャ区にある国際貿易センター
下　やはりクラスナヤ・プレスニャ区にあるロシア連邦共和国閣僚会議（政府）庁舎

イワンはプロホロフ工場（現在のトリョフゴールナヤ織物コンビナート）の寮（当時は寝ぐらと呼ばれていた）に母親と姉妹と暮らしていた。一九〇五年の革命が起こった12月の思い出はイワン・クルイロフの一生を通じる思い出となった。もちろん、断片的でおぼろげな思い出だが、まだ年端もいかない子供の目に映った出来事だから、それは仕方がない。



少年時代に1905年12月のプレスニャを体験したイワン・クルイロフ

いまでも彼は、興奮した人々があふれた工場の広々とした空き地の光景や、大きな労働者用食堂で絶え間なく集会が開かれ、演説する者は最後に必ず「ツァーをぶっ倒せ！　労働者の共和国万歳！」と叫んだことが目に浮かぶ。また工場からプレスニャ門へ行く、当時散歩道と言っていた辻公園の情景を目に見るように思い出す。この辻公園には一足ごとに、電信柱を倒して有刺鉄線を張ったものがあった。プレスニャ門のところは、電車（当時の電車は馬で引いた）の車両、そり、樽、ドア、砂袋などを積み上げた馬鹿でかいバリケードがあった。プロホロフ工場の近くにニス・塗料工場があった。撃ち合いが始まると、工場の構内に砲弾が落ちてくる。直撃を受けてニスやペンキの樽が爆発しはじめた。巨大な炎のかたまりが空中に舞い上がり、想像を絶する轟音がした。人々は肝をつぶして、四方八方へ逃げだした。クルイロフ一家と親しかった労働者戦闘隊の青年レオニード・ベロウーソフが懲罰隊に捕まって銃殺された。イワン少年と母親がレオニードの遺体を引き取りに警察署に出かけた。銃殺された死体が山積みになっていた。ひとりの警官が母親に乱暴なことばで話し、つまみ出してしまった。



かつてのゴルバーティ橋。1905年12月、この橋のそばで労働者戦闘隊とツァーの軍隊との間に激しい戦闘が繰り広げられた。

少年時代に見たもの、体験したものは成人してからその意味が分かるようになり、イワン・クルイロフを永久にプレスニャと"トリョフゴールナヤ工場"に結びつけてしまった。大きな生活が音を立てて流れはじめた。彼は労働者だったので、一九一七年の10月革命に参加した。国内戦中は主な戦線で国内の反革命勢力や諸外国の干渉軍と戦い、またヒトラー・ドイツとの大祖国戦争のときは祖国を守って戦った。ひと口で言えば、あの世代に属する人間の典型的な経歴である。年金をもらう年頃になってから、クルイロフは文筆活動にたずさわった。彼は自分のことや、友だちのことを題材にした『赤衛兵の手記』という本を著した。

これらの人たちの名と、あの苦難の日々に彼らが発揮したヒロイズムは、永久に人民の記憶に残るであろう。

第15回日ソ労働組合集会

両国労組の交流拡大を

——V・プロウォトロフ・ソ連代表団長に聞く



▶日ソ労働組合集会であいさつする黒川・総評議長（写真提供＝総評新聞。以下同じ）

11月8、9の2日間、広島で第15回日ソ労働組合集会が開催され、ソ連からビタリー・プロウォトロフ書記（59歳）を団長とする全ソ労働組合中央評議会代表団が参加した。プロウォトロフ団長にA・ラザレフ・ノーボスチ通信記者がインタビューして、今回の集会についての感想を聞いた。以下はその談話。



V・プロウォトロフ団長

〝ソ日両国民の平和と友好のために〟をモットーとするソ日労組集会は長い歴史と一定の伝統を持っている。20年前に始まったこの集会は、両国労組のナショナルセンター同士の協力の進歩的形態の一つであるとわれわれは考えている。ご存じのように、これまでのソ日労組集会では、一億三七〇〇万の勤労者を結集する全ソ労評がソ連側を代表し、日本側は総評と中立労連が代表してきた。これらの大衆的フォーラムの開催中、両国の労組活動家は自分たちの組織の活動について情報を交換し、ソ日間の善隣関係を強化する諸問題や平和の確立、軍拡停止、核兵器とその他の大量殺人兵器の削減・廃絶をめざす勤労者の闘いを強化する問題を建設的な友好的雰囲気の中で話し合ってきた。

今回の労組集会に参加するため40人から成る全ソ労評の代表団が広島を訪れた。団員はモスクワ、レニングラード、ボルゴグラード、クラスノヤルスク、ノボシビルスク、ウラジウォストクなどから派遣されてきた人たちである。全ソ労評や一連の産業別労組の幹部だけでなく、労働者、建設者、ジャーナリスト、著名な文化人や芸術家、学者、第2次世界大戦の参戦軍人が代表団に加わっていた。たとえば、2度もソ連邦英雄の称号を受けた宇宙飛行士のワレリー・リューミンは日本側参加者の大きな関心を集めていた。

集会は、われわれの考えでは成功裏に終わった。戦争防止や軍事費削減の問題、現在軍事目的に充てられている費用を労働保護や人々の生活条件の改善に利用することなどの諸問題に関して活発な討論が行われた。会議での発言や、会議の合い間に行われた多くの交流から分かったことだが、日本の友人たちがソ連の政策を注意深く見守り、ソ連政府、特にゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が行った、軍備削減、宇宙の軍事化防止に関する平和愛好提案を肯定的に評価しているのは、われわれには非常にうれしかった。また、今年の8月6日、つまり広島の悲劇の40周年の日から、核実験を凍結するというソ連の決定に熱烈に賛同する声を広島で聞けたのは大変にうれしかった。

定期的なソ日労組フォーラムは非常に重要だが、これは両国の労組ナショナルセンター間で行われている交流のすべてでは決してない。両国労組間の交流は双方の協力計画を作成するソ日労働組合委員会で決定され、方向づけられている。ソ日間では労組代表団の定期交流が行われている。二国間または多国間のシンポジウム、活動の経験交流が行われている。労組のチャンネルを通じてスポーツ代表団やアマチュア芸術集団の交流が活発に行われている。労組は印刷物の交換や写真展の相互開催その他の交流をしている。

産業別労組の線による広い交流も行われている。ソ連の約20の単産が日本の同僚と緊密な関係を維持している。

さらに、地域別諸組織の線による交流、つまり個々の州、県、都市間の労組組織の交流もかなり順調に行われている。この活動は全ソ労評が全面的に後援している姉妹都市運動の課題にかなり近いものである。たとえば広島とボルゴグラードを例にとろう。広島の労組代表団がつい先だってボルゴグ



分科会で意見を交換する両国代表団

ラードを訪れ、今またこの広島集会のわれわれの代表団の中にもボルゴグラードからの団員がいた。彼らは互いにその活動と成果に詳しく、彼らの間には良好な実務的、友好的関係がある。だからわれわれは採択された広島集会宣言の中に、広島とボルゴグラードの手本と経験を指針として、地域的関係を発展させるべきだとのテーゼを入れようという日本側の提案に理解をもって応じたのである。ついでだが、同じような関係がすでに、モスクワ＝東京、レニングラード＝大阪、リガ＝神戸、ミンスク＝仙台、オデッサ＝横浜、その他多くのソ連と日本の姉妹都市間にある。

互いに良く理解し合うためには互いを良く知らねばならない。広範な交流をめざす動きをわれわれは全面的に支持する。日本側も同じ立場に立たれることを期待する。

今、ソ連国民はソ連共産党第27回大会の準備を積極的に行っている。この大会でソビエト国家の生活と活動の数多くの問題が解決される。ソ連共産党綱領新稿と「一九八六—九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」が審議・採択される。これらの文書はソ連の労働組合の活動に最も直接的な関係を持っていることを考えに入れねばならない。われわれの国は社会主義の国である。権力は勤労者のものだ。勤労者の一人ひとりが党と政府が立てた、ソビエト人の精神的・物質的要求を速やかに満足させるための計画の遂行に興味を示さねばならない。

このことについて、またその他多くのことについて、われわれは、労組集会や広島、京都、名古屋、熱海、東京での無数の会合で、日本の友人たちに語った。

われわれは心から、日本の友人たちの仕事の成功と健康、平和で幸せな生活を祈り、そしてまたソ連国民との友好関係が強化されることを希望する。それはソ日両国の善隣関係の保証になるだろう。この同じ言葉を「今日のソ連邦」誌の尊敬する読者の方々にもおくります。



集会では芸能交歓会も行われた。写真は広島太鼓保存会の熱演。

ソ連代表団員によるロシア民謡の独唱



文化トピックス

由緒ある 文学喫茶店

このほどレニングラードのネフスキー大通り18号館に"文学喫茶店"が開店した（写真左）。その昔ここには有名な菓子店があり（下の版画参照）、その一角が文学喫茶店になっていた。ロシアの大詩人プーシキン（1799―1837）も常連の1人で、1837年1月27日には、介添人と一緒にここから決闘の場所におもむいた。

建物は往時の姿に復元され、扉の奥では外の騒音をよそに、音楽と当時のメニューを楽しむことができる。





兄弟ジャズアンサンブル



上は21歳から下は5歳まで、イルクーツク市のオベチキン兄弟7人のジャズアンサンブルが登場すると、会場はそれだけでほほえましい、なごやかな雰囲気になる。だが兄弟は珍しさや"かわいさ"だけが売り物ではない。グルジア共和国の首都トビリシで行われた全ソ・ジャズフェスティバルで入賞した実力も持っているのだ。レパートリーもソ連の作品だけでなく、外国の作品まで幅広く、それぞれが自分のパートをよくこなす。

兄弟は早くに父親を亡くし、母親には11人の子どもが残された。だから早くから音楽だけに専念してはいられない。朝は早くから家事を手伝い、夜になってから練習に打ち込む。

一般公開された宮殿





レニングラード州ガッチナ市で、18世紀に造営されたガッチナ宮殿が、長い修復作業ののち、まず14ホールが公開されることになった。ペテルブルグ（現レニングラード）近郊で最大の規模を誇ったこの宮殿（面積二万九五〇〇平方m）は、一九四四年にファシスト・ドイツ軍によってほとんど完全に破壊され、火を放たれた。

約10年間の修復作業でやっとホールが当初の姿を取り戻し、いまようやく、イタリアの名建築家アントニオ・リナルディ、ビンツェンツォ・ブレンナ、ロシアの建築家ロマン・クジミンらが2世紀にわたって拡充、改築した宮殿と庭園の全貌を見ることができるようになった。写真上は宮殿内の玉座の間。

“平地”のアルペンスキー

本誌記者 アロイズ・フィル
カメラ A・グシチン

スポーツ



“赤ずきんちゃん”も登場するシーズン開きの祭り



▶ルバシカを着込んで彩りを添える

一九七〇年代から始まったソ連のアルペンスキー・ブームは、全国に広がった。いまや数百万人が――上手下手の差はあれ――アルペンスキーに親しんでいる。ゲレンデも高い山の上とは限らず、まったく平坦だとさえ思われるような場所にまで作られている。

たとえば、冬のモスクワ郊外。丘と谷が織り成すさまざまな斜面に、リフトのワイヤーが走っている。モスクワの北70kmのクリンスコ・ドミトロフスカヤ丘陵はアルペンスキー・ファンに人気がある。

もちろん、平均二〇〇―三〇〇mのコースは本場アルプスやカフカズのゲレンデには比べるべくもないが、その代わり、極めて変化に富んでいる。

モスクワの企業や官庁のスポーツクラブは州内のあちこちに冬季スポーツ基地を持っている。滑走競技の愛好家は毎年ここへ家族連れ、仲間同士、職場集団ごとでやって来る。ここでは独自の習慣、独





会場のあちこちで笑いや歓声が起こる



ロデオ・スタイルが駆け下る

自の伝統さえでき上がっている。

シーズン開きの祭りもその一例だろう。12月のある土曜日、最も広くて最も長いスロープに全員が集まる。祭りはスポーツクラブ対抗競技で始まる。ここにはファンだけでなく、アルペンスキーの専門家さえも満足させるものがある。モスクワ近郊の小さな丘で国際級の多くの選手が、ビッグスポーツへの第一歩を踏み出したのである。シーズン開きのこの日、彼らは祭りに彩りを添えるために、古巣のクラブへやって来る。

公式の競技が終わって、審判長が順位を発表すると、スラロームのスタート地点に仮装した人々が登場する。コスチュームそのものはでたらめで、ただこっけいでさえあればいいのだ。もちろん、全員スキーを履いている。彼らは叫び声を上げ、口笛を吹き鳴らしながらスロープを下り、滑りながらこっけいな技を見せる。平らなところまで滑り降りても、余興をつづける。



ホウキに乗って舞い降りて来た魔女



突如現れた大音楽家

祭りにご馳走はつきものだ。あちこちで即席の宴会が始まる。じかに雪の上で、伝統的なロシアのクレープ――ブリヌイにサワークリームやジャム、キノコやイクラを載せて頬張り、カフカズ風の肉の串焼きにかぶりつく。

澄んだ森の空気、一面の銀世界、自然と触れ合う喜び、陽気な仲間たち。これではどんなに四角四面の人間でも相好をくずし、むっつり屋もおどけ、心配性もうさを忘れるというものだ。



ミス仮装大会に選ばれた"赤ずきんちゃん"



これは真面目な滑降

トラ年を前にして

――トラの話あれこれ

本誌記者　オリガ・ベドニャコワ



トラは哺乳類食肉目ネコ科

日本の暦の干支によれば、きたるべき一九八六年はトラ（寅）年である。そこで、大地の力の化身と考えられているこの優美な動物について少し語ろうと思う。といっても、大真面目な話ではない。新年を前にして、気分も少し浮かれていることだろうから……

そもそもわが国では、トラは特に人気のある動物ではなく、どこにでも住んでいるというわけでもない。たとえばクマと比べてみよう。一九八〇年のモスクワ・オリンピックのさい、マスコットに子グマのミーシャが選ばれたのも偶然ではない。とはいえトラも、われわれにとっては決してエキゾチックな動物ではない。ソ連には、トラは動物園にだけでなく、自然の山野にも住んでいる。それも、実に見事なトラが。それはトラの亜種の中でいちばん大きいアムールトラ（シベリアトラ）で、体長2・8m（全長4・2m）、体重三〇〇kgにも達し、毛も長い。中国北東部からアムール・ウスリー川流域に分布し、全生息域の$\frac{1}{3}$以上がソ連極東に属する。現在は国家の保護のもとに置かれており、ソ連のレッド・データ・ブックにも記載され、国際自然保護連合の国際保護動物にも指定されている。

アムールトラについては、またあと



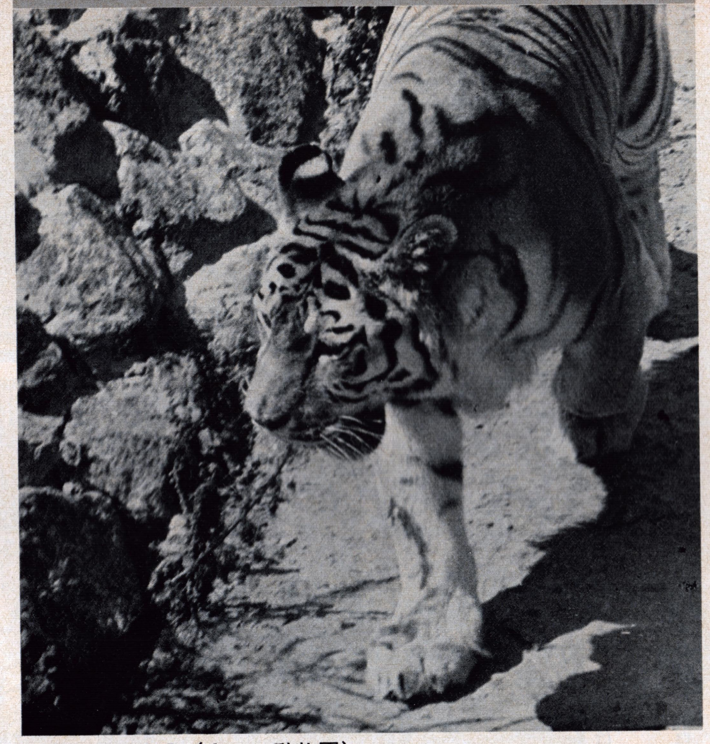
で触れることにして、こんどはもっとよく見かけるトラたちにも目を向けてみよう。
映画の撮影のときならいざ知らず、ふつう、トラはソ連の都市の通りを歩くようなことはない。それでも、トラとネコが違うことぐらいは子どもでも知っている。もちろん、親が写真や絵本やオモチャを使って〝教育〟するからだ。オモチャといえば、子どもだけでなく、大人でさえプレゼントし合う。12年前、やはりトラ年を迎えるにあたって、私は縫いぐるみのトラをプレゼントされた。いま、その縫いぐるみのトラは、私がトラについて原稿を書くのを緑色の目で見守っている……
物語にもトラはよく登場する。ロシ



下 エレバン動物園（アルメニア共和国）でベンガルトラの子を診察する獣医たち

キエフ動物園（ウクライナ共和国）のトラ





王者の貫禄十分（キエフ動物園）

母親代わりのイヌの乳を吸う子トラ





▶トラの名調教師マルガリータ・ナザロワ



トラはサーカスの人気者



おいしそうな肉だなあ（右端は調教師ステパン・デニソフ）



▼チェスを指す？

アの民話にはトラはそれほど頻繁には現れないが、ソ連に住む他の民族の伝説やおとぎ話では、トラは立派な地位を与えられている。たとえば、アムール川流域の諸民族の民話では、トラは非常に人気がある。ニブフ人などは、トラを特別な人種だとさえ考えていた。彼らはトラを〝トラ人間〟または〝森の人間〟と呼んでいた。トラを殺してはいけないと考えていただけでなく、逆に敬意を表明しなければならないとさえ考えていた。トラはしばしば、人間を助ける善良な動物として登場する。わが国では世界の各国の民話が出版され、あらゆる世代の人々に愛読されているので、外国のトラの生活や性質まで居ながらにして分かる。

われわれはだれでも、子どものころの楽しい思い出をたくさん持っているが、特に忘れられないのは、初めて動物園へ連れて行ってもらった日のことだろう。とうとう本物の、生きたトラを見たのだ。大人のトラを見るときはおっかなびっくりだが、子どものトラは少しもこわくない。一緒に遊びたくなるほどだ……

わが国には動物園が33あり、その多くがトラを飼っている。トラを飼っているのは大都市の動物園だけとは限らない。たとえば、ウクライナ共和国チェルニゴフ州メーナ市の動物園。熱心なボランティアの協力によって、ここには大都市の動物園でさえ羨むほどすばらしい動物たちが集められた。動物たちの住み心地もよさそうだ。どうしてか、って？　トラをはじめ、すべての動物たちが放し飼いされ、繁殖しているからだ。

トラはサーカスの立て役者でもある。トラを仕込むほどの勇敢で忍耐強い調教師の名は、ファンにはよく知られている。マルガリータ・ナザロワ、リュドミラ・シェフチェンコ（このふたりは記者と同じ女性ですぞ！）、ワリテル・ザパシヌイ、ウラジーミル・シェフチェンコ、ステパン・デニソフ……

サーカスに出演するトラは、映画にも出演する。中央テレビではコメディー『トラ使い』（一九五五年作、脚本K・ミネツ）がしばしば放映される。リュドミラ・カサトキナ、パーベル・カドチニコフ、セルゲイ・フィリポフ、レオニード・ブイコフといった名優たちと一緒に、プルシをはじめとするトラたちが出演し、調教師マルガリータ・ナザロワ、監督アレクサンドル・イワノフスキー、ナタリア・コシェベロワのチームワークで、1時間半にわたって明るい笑いと楽しい気分を届けてくれる。

もう一つの人気コメディー映画『縞模様の航路』（一九六一年作、脚本A・カプレル、V・コネツキー、監督V・フェティエ）も忘れることができない。主役は調教された動物たち。大きな船で外国公演に連れて行かれるところである。いたずら者のサルがトラのオリの戸を開けてしまう。さあ大変！トラたちは甲板を走りまわり、乗組員や乗客たちをパニックに陥れたあと、海に飛び込む。船はちょうど、保養客たちが長イスにだらしなく寝ころがっている砂浜の近くを通っていた。保養客の一人が海を見て叫ぶ――「見ろよ、縞模様の水着を着た一団が見事に泳いでいるぞ」。一団は近づいて来る。縞模様の水着だけでなく……トラの顔が



▲トラの中で最も大型のアムールトラ



春ではなく、1月末の零下40度の厳寒期にノボシビルスク動物園（シベリア）で生まれた2頭のトラの子の1頭トゥッキ。母親が面倒を見なかったため、動物園の職員たちに育てられた。夏になって30度を超える暑さのため、郊外へ水浴に連れて行ってもらうところ。

見えた。保養客たちはあっという間に砂浜から姿を消し、そこへ水の中から悠々とトラたちが上がって来る。

さて、冗談はこのくらいにしておこう。トラについての文学と映画ということになれば、ロシア・ソビエトの有名な探検家で作家のウラジーミル・アルセーニエフ（一八七二―一九三〇）の作品を挙げないわけには行くまい。『ウスリー紀行』と『デルス・ウザーラ』である。ここには特別なドラマはない。聡明な人間がタイガの中を歩き、あたりを観察し、見たものを記録しているだけである。淡々とした文章。腹を空かせ、凍え、痛い目に遭い、恐ろしいトラに用心する……これが飾り気なく、しかし奥行き深く語られている。ときおり例外的に、詳しく、熱を込めて、興奮気味になるところがある。それは案内人でもあり友でもある老ナナイ人、デルス・ウザーラについて描写するくだりである。

アルセーニエフのこの作品――『デルス・ウザーラ』にもとづいて黒澤明監督が映画を作った（モスフィルム、一九七五年）。主人公たちとトラの出会いの場面は、この映画の最も忘れがたいシーンの一つである。

この映画に〝出演した〟トラが、アナトリー・ブイロフがウスリーのタイガで捕まえた18頭のトラのうちの1頭だというのは興味深い。2年前、トナカイ飼養者たちについて書いたブイロフの本『大遊牧地』が出版された。これは大成功を収め、一連の賞を受け、いくつかの外国語にも翻訳された。現在〝ソブレメンニク〟出版所でブイロフの第2作『トラ狩り』の出版の準備が進められている。ブイロフはタイガの中でほぼ10年過ごし、さまざまな印象を蓄えたので、タイガで狩猟を業とする人々の生活を生き生きと描くことができる。彼の作品の主人公たちは、トラ狩りという珍しい職業をロマンチックだともエキゾチックだとも考えておらず、単なる危険な仕事だと考えている。若い猟師たちは経験豊かな猟師から、古い足跡で獣の体重や癖を知り、生け捕りして、足を正しく縛る方法を学ぶ。雌トラはほぼ4歳になるまで子トラを連れ歩き、餌を獲って与える。強くてすばしこいトラも、本来は〝お母さん子〟なのだ。子トラは無力そうだが、それでも人間が捕まえようとすれば、本能的に、死物狂いで闘う。

もちろん、動物園のためのトラの捕獲は厳しく規制されている。少し前まで、アムールトラはプリモーリエ〔沿海〕地方全域、ハバロフスク地方南部、アムール州南部の森に住んでいた。19世紀中ごろ以来、人間の影響（干渉）によって、生息域は縮小し始めた。19世紀末には毎年一〇〇頭ほどが捕獲されれ、一九一二年には約60頭が捕獲された。アムールトラは減りつづけ、一九四〇年ごろには約30頭にまでなってしまった。一九四七年にはソ連極東でのトラの捕獲は全面的に禁止された。一九六〇年から動物園用に一定頭数だけ捕獲することが許可された。一九三五年にプリモーリエ地方にシホテ・アリニ自然保護区とラゾ自然保護区が設けられた。効果はすぐに現れた。一九八〇年代の初めまでにアムールトラはソ連で二〇〇頭を超えていた。つけ加えておけば、一九八〇年12月31日現在、世界中の動物園で合計一〇四六頭のアムールトラが飼われていた。一九七六年から毎年、ライプチヒ動物園（ドイツ民主共和国）が主宰する国際トラ台帳が刊行されている。アムールトラは人工的な条件のもとで確実に維持されているのである。

だから、アムールトラは生き長らえると期待していい。もちろん、なぜトラが必要なのか、なぜ保護しなければならないのか、と疑問を抱く人もいる。私にはアナトリー・ブイロフの『トラ狩り』の思想は大胆で賢明だと思われる。そこにはこう書かれている。

「われわれはすべて自然に対して同等であり、弟でもなければ、兄でもないのではないだろうか？　一つの真理に向かって、恐らく宇宙の深部にではなく、われわれの隣に、われわれ自身の中に探さなければならない一つの法則のようなものに向かって飛んでいる何か一つのものがあるだけではないだろうか？」

※　※　※

トラ年がやって来る。もちろん、干支をまじめに信じている者はいない。だが、新しい年を馬鹿にする必要があるだろうか？　編集部に電話がかかってきた――トラ年をどう迎えればいいのか、トラ年を手なずけるにはどうしたらいいか、と。われわれは知っていることは答える。知らないことについては、モスクワに住んでいる日本人にときどき相談する。

私は少し前、2巻ものの大事典『世界諸民族の神話』で、日本の伝統によれば、竹やぶの中のトラは、日常の世界において悪にとりつかれた人類を象徴している、という説明を読んだ。

悪は必要ない。親愛な読者の皆さんすべてが、実際にも、絵の中でも、夢の中でも、竹やぶでトラに遭遇しないことを望む。トラ年がもっぱら平和と健康、幸せと善をもたらすことを！

ソ連共産党第27回大会に向けて

ソビエト社会とソ連共産党(3)

21、22号に続いてソ連共産党とソビエト社会の生活における党の役割に関する読者の質問にお答えします。

――民主集中制とは何か？

現在のソ連共産党の党員数は一八五〇万人で、初級党組織数は四三万三〇〇〇ある。初級党組織は各企業、各コルホーズとソフホーズ、各省庁などで活動している。党の多数の組織と一八五〇万党員の思想は統一しているので、党の組織と党員は明確な目標をめざして活動できる。思想的統一は、党員を、志を同じくする者の大集団に結集している。しかしレーニンが何度も強調したように、党の思想的統一は組織面の統一によって裏打ちされねばならない。その目的に役立っているのが、共産党の組織構成と活動の指導原則――民主集中制の原則である。

では民主集中制の原則とは、具体的にはどういうものか？

(1) 下部から上部までの党のあらゆる指導機関の選出制。(2) 自分の所属党組織と上級機関に対して党機関が定期的に報告すること。(3) 厳しい党規律と少数が多数に従うこと。(4) 下級機関は上級機関の決定を無条件に受け入れ、実行する義務があることなどである。

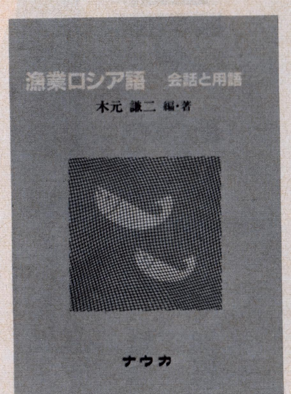
指導機関は民主集中制の原則に基づき、党組織での秘密投票によって選出され、行動する。たとえば党の最高機関であるソ連共産党大会はソ連共産党中央委員会を選出する。この中央委員会は規約に基づいて大会から大会までの期間の党の活動全体を指導する。中央委員会の決議は、すべての党の機関と組織にとって義務である。いまソ連共産党は第27回定期大会の準備を鋭意進めている。大会は5年ごとに開かれる。先の第26回大会は一九八一年春に開かれた。

ソ連共産党は民主主義と集中制を、切り離すことのできない全一的なものの両面だと見ている。民主集中制の原則の効能は、この原則が党大衆のイニシアチブと規律を血肉のように結合している点にある。党員は党の集会で党生活のあらゆる問題を積極的に討議する。討議されるあらゆる問題について自分の意見を述べ、根拠づけ、討論することは、各党員の切り離すことのできない権利である。しかし一旦多数決で決議が採択されたなら、意見が違い、別の決議を提議した者も含め各党員は、多数決できまったことを実行しなければならない。あらゆる問題を討議するさいの意見の自由、完全な民主主義、決議が多数決で採択されたあと決議を実行する自覚ある規律――これがソ連共産党の不変のおきてである。

中央委員会は民主主義と中央集中制の双方をともに重視し、あらゆるレベルの党機関における民主主義の発展と深化や中央集中制の強化と決議を実行するうえでの組織性と統一の強化にたえず注意を払っている。

民主集中制も社会主義の政治体制全体の活動の指導的原則であり、国家権力機関、労働組合、コムソモール、その他のすべての社会団体の活動の基本原則である。民主集中制はソ連憲法の中にも反映している。

新刊紹介



木元 謙二 編・著

漁業ロシア語
――会話と用語――

ソ日両国の漁業面の協力と相互理解を深めるうえで、関係者やロシア語学習者から長い間待たれていた漁業ロシア語の参考書が、このほどナウカ株式会社から発行された。

本書は北洋の魚介類、北洋漁業で使われる漁具、漁網、漁法、航海の専門用語、漁業交渉・条約、水産物の加工・製造などの用語、ロシア文字のモールス信号、船舶内の職名が網羅されており、これまでの露和辞典に欠落していた部分が補塡されている。もちろんロシア語の文字、発音や会話の基本文型なども収められおり、文例にはカタカナで読み方がついている。

誰にもすぐに役立つ漁業現場の生きた表現が会話で構成されており、はじめてロシア語に接する人も、自信をもって話せるので重宝である。

本書はＢ６判320ページ、定価3200円。ナウカ株式会社の住所は東京都千代田区神田神保町２－12－３（電話03・264・0021）。

一六〇周年

デカブリストの乱

アカデミー会員 ミリツァ・ネチキナ



ピョートル・カホフスキー
(1797—1826)



ニキータ・ムラビヨフ
(1796—1843)



ベストゥージェフ3兄弟の長兄
ニキータ(1791—1855)



コンドラチー・ルイレーエフ
(1795—1826)



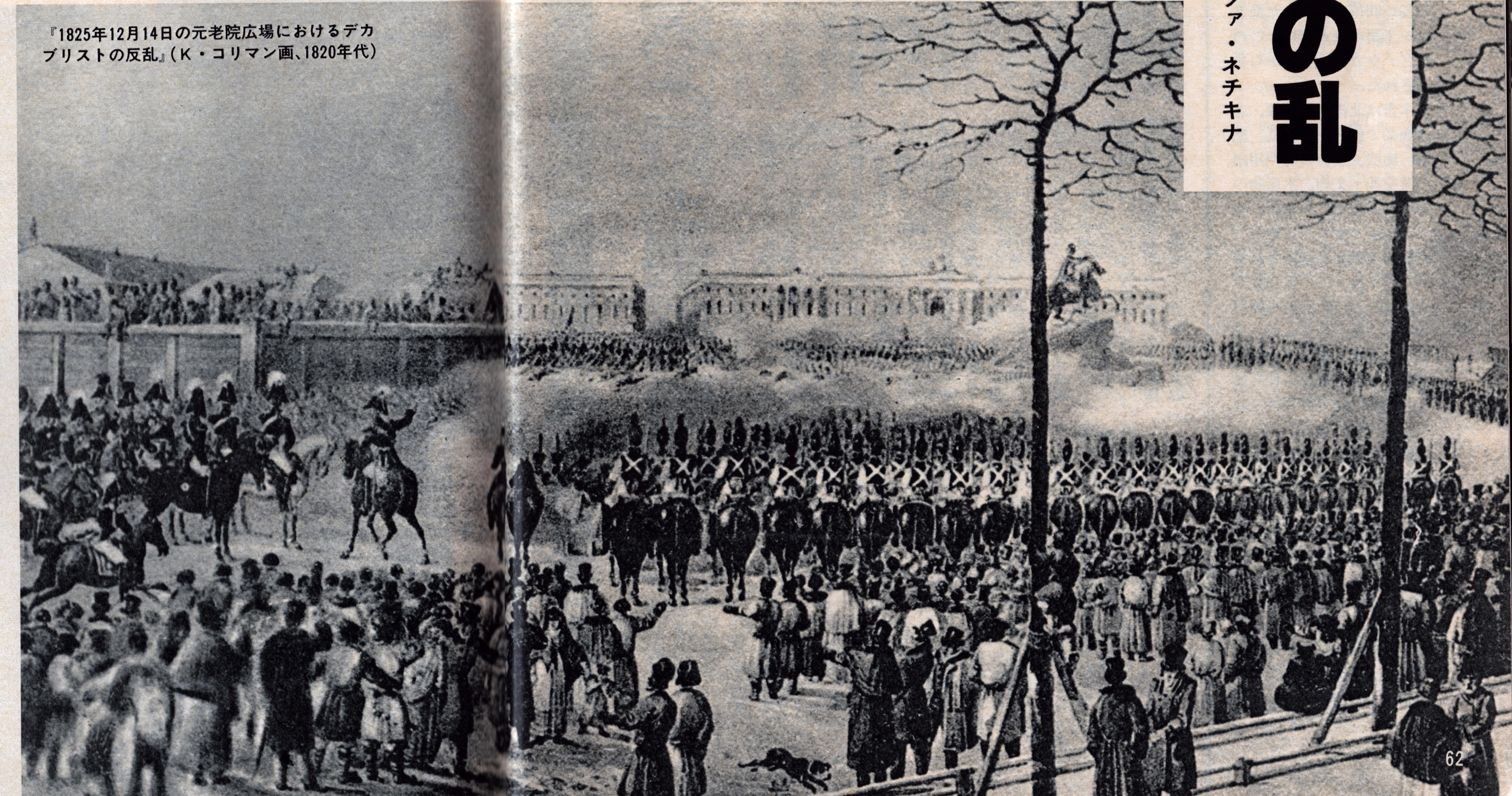
パーベル・ペステリ
(1793—1826)

12月14日はペテルブルグ(今のレニングラード)の元老院広場でデカブリスト(12月党員)が蜂起した一六〇周年記念日に当たる。デカブリストは武器を手にして専制政治と農奴制に反対した最初のロシアの革命家たちで、蜂起した月が12月であったところからデカブリストと呼ばれている。

レーニンは、ロシアは一八二五年に「初めて帝政打倒の革命運動を目にした」と書き、デカブリストたちをロシアの人々の民族的誇りであるとたたえた。

デカブリストの最初の秘密結社は一八一六年にペテルブルグでつくられた。当時この結社に加入した人はまだ30名余りと少なく、主に近衛将校たちだった。結社の創立者は24歳の参謀本部大佐アレクサンドル・ムラビョフだった。一八一八年に加入者は二〇〇名以上となり、たえず増え続けた。一八二〇年の秘密結社の総会で、未来の統治形態(立憲君主国か共和国か)について論争が起こり、多くの結社員は共和国制に賛成した。

一八二一年までに将来の反乱の主要な本部(ウクライナの南部結社とペテルブルグの



『1825年12月14日の元老院広場におけるデカブリストの反乱』(K・コリマン画、1820年代)

北部結社）が創立され、これらの結社ではデカブリスト運動の綱領的文書――パーベル・ペステリの「ルースカヤ・プラウダ」とニキータ・ムラビョフの憲法がつくられた。

デカブリスト時代のロシア

デカブリストが活動した時代には、ロシアの封建・農奴制と絶対主義を廃絶することが、明確な歴史的必要となっていた。

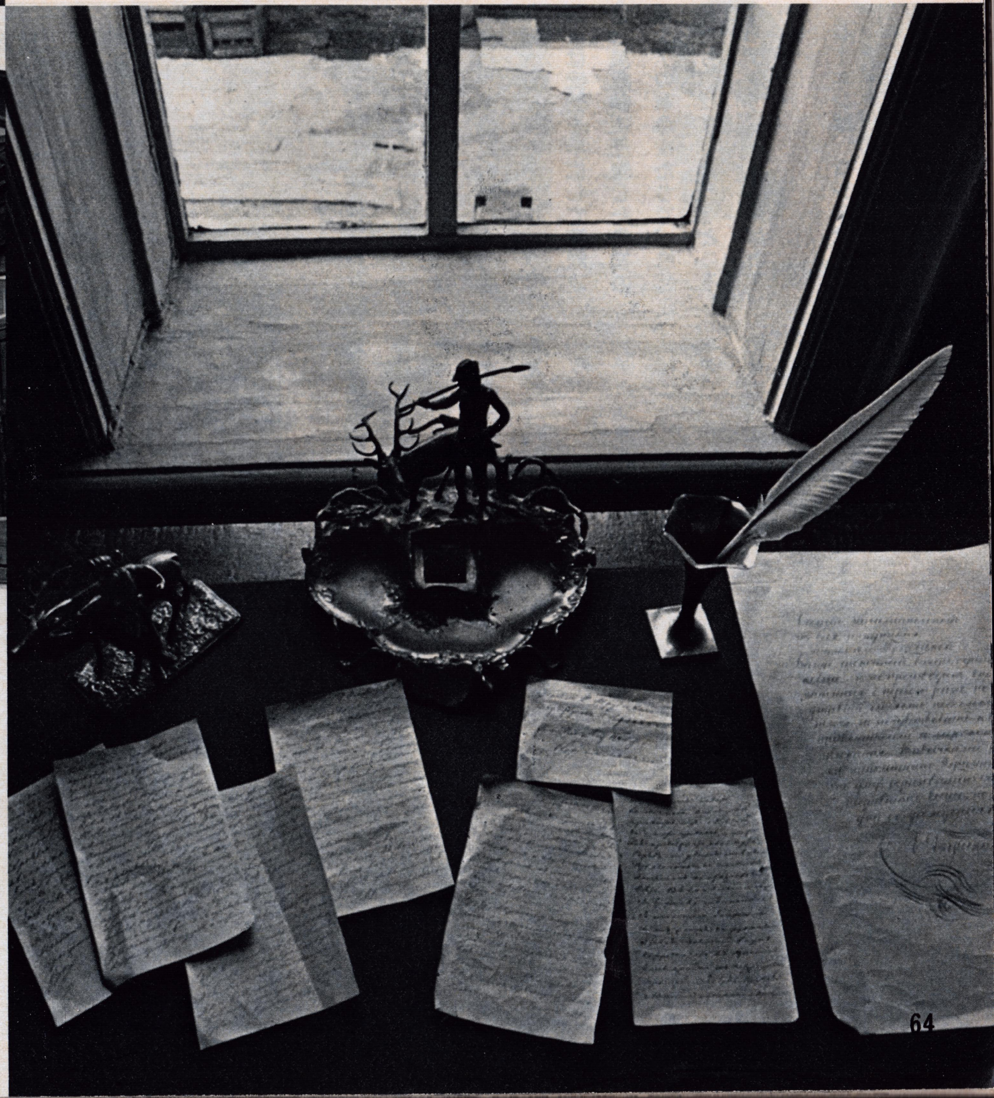
デカブリストの運動はロシアの現実を地盤にして成長した。この運動を生み出したのは、単にロシアのすぐれた知識人が西欧の先進的哲学に引かれたことやナポレオンの壊滅に続くロシア軍の海外遠征の経験、また18世紀末―19世紀初めの西欧の革命の手本だけではなかった。ロシアの歴史的発展の客観的動きや国内の社会的・経済的動きの流れそのものが、運動を生み出す原因になったのである。専制・農奴制は国の生産力を拘束し、生産力の発展を阻んでいた。デカブリストは反封建制、反専制の闘争が自分たちの活動の主要目的であることを客観的に自覚した。彼らは地主の農奴制領地の生活を調べたり、侵入してきたナポレオンから祖国を守って血を流した



デカブリストの旗



イルクーツクのデカブリスト旧居博物館



▶イルクーツクのデカブリスト旧居博物館に展示されているセルゲイ・トルベツコイ（1790―1860）の遺品



◀マリア・ボルコンスカヤの愛用したショール（イルクーツクのデカブリスト旧居博物館）



▶シベリアでの懲役刑に処せられたデカブリスト、セルゲイ・ボルコンスキー（1788―1865）の夫人マリア・ボルコンスカヤ（1805―63）。夫の後を追ってシベリアへ行ったデカブリストの妻たちの一人。



▶▶デカブリストたちを拘束した手足のカセ（チタ市郷土博物館）

一八一二年の祖国戦争のさまざまな出来事を見たり、海外遠征を通じて「諸国人民と皇帝たちの戦争」（封建的抑圧反対のたたかい）を自分の目で見たりして、自分たちの考えを形成していった。

祖国をナポレオンの軍隊から英雄的に守った民衆は、農奴制から解放されることを待望した。しかしその期待も空しくついえた。一八一二年戦役から帰った兵士たちは「われわれは血を流したが、またも賦役で苦しまねばならない。われわれは祖国をナポレオンから救ったが、またも旦那衆がわれわれを虐げる」と嘆いた。一八一三―一八一五年の戦役中外国へ行った兵士たちは、農奴制がすでに廃止された国々をじかにその目で見たのである。

ロシアでは19世紀の初めの25年間に革命的情勢が生まれたが、それは途中でしぼんだ。それもデカブリストの蜂起が失敗した主因であった。

蜂起計画

一八二五年11月アレクサンドル一世は、ロシア南部を旅行中タガンログで急死し、12月14日に皇帝になる弟ニコライの宣誓式が行われることになった。ニコライは粗野で残忍であり、国民だけでなく、軍隊からも憎まれていた。デカブリストはこの日を武装蜂起の日に選んだ。

12月13日の深夜デカブリストの指導者の一人コンドラチー・ルイレーエフの部屋で、行動計画が作成された。計画によると、12月14日の朝秘密結社員たちの指揮する軍隊は元老院広場に集結し、宣誓式に出る元老院議員を武力で抑えて、ツァー政府の退陣を声明させ、国民への革命的声明（マニフェスト）を布告させる予定だった。声明には、旧政体の廃絶、臨時革命政府の樹立がうたわれ、農奴制の廃絶と法の前での全市民の平等、出版の自由、信仰の自由、職業の自由、裁判の公開と陪審制の導入、新兵募集の廃止、すべての身分の間での兵役義務の平等化と国内の国民衛兵隊の創設、人頭税とその滞納金の廃止がうたわれていた。またすべての政府役人は選挙された者と交替しなければならないと定められていた。

反乱部隊が元老院を封鎖すると直ちに、革命代表団は元老院内に入り、元老院に要求を実行させることになっていた。それと同時に数部隊は皇帝のいる冬宮に進入し、皇帝と皇帝一家を逮捕し、さらに農奴制の廃止手続きやロシアの国家機構形態、土地問題について最終決定を採択するために制憲会議が招集されるはずであった。制憲会議が多数決でロシアを共和国制にするなら、同時に皇帝一家の運命も決められることになっていて、デカブリストの一部は皇帝一家の国外追放を、また一部は処刑を主張した。制憲会議がロシアを立憲君主制にすると決めれば、皇帝一族の中から立憲君主が選ばれる予定であった。またペテルブルグにおける帝制の主な軍事的とりでであったペトロパブロフスク要塞を占拠する手はずになっていた。

12月14日の元老院広場

朝もやの中をまずモスクワ連隊の兵士たちが連隊旗をなびかせ、銃にタマ込めをして元老院広場に到着した。このロシア史最初の革命部隊の指揮官は歩兵二等大尉アレクサンドル・ベストゥージェフであった。

午前11時、ペテルブルグ総督ミロラドビチ伯爵は、兵士に解散するよう説得しはじめた。一八一二年戦役のヒーロー、ミロラドビチは人望があって、兵士の説得にあたることができる器であった。ミロラドビチは兵士の決意を揺るがすことに成功し、始まったばかりの反乱は危機にさらされた。デカブリストの将校の退去要求を蹴って、ミロラドビチはそのまま居座って立ち去ろうとはしなかった。そこで反乱軍の参謀長エブゲニー・オボレンスキーは銃剣で伯爵を突いて負傷させ、さらにピョートル・カホフスキーが総督に発砲して致命傷を負わせた。

しかしあとで分かったことだが、反乱者たちが広場に到着する前にすでに元老院議員たちは、新皇帝ニコライ一世に宣誓をすませ、解散したあとだった。つまり反乱部隊は肝心の議員のいない元老院の前に集まったわけである。こうしてデカブリストの第一の目的はついえた。

やがて補充部隊の近衛部隊がネバ川の氷の上を渡ってきた。別方向から近衛水兵が元老院広場に入り、広場には30名のデカブリストの将校と約三〇〇〇名の反乱兵士、水兵が集まった。全員が銃を持っていた。

しかし皇帝ニコライ一世は主導権を握り、反乱部隊の4倍の兵力（騎兵、砲兵を含む）を広場に引き入れた。こうして皇帝に忠誠な部隊は反乱部隊を包囲して攻撃したが、射撃によって撃退された。

反乱の鎮圧

短い冬の日はもう暮れかかっていた。「長い間野外につっ立っていた将兵は、肌をさす冷たい風にさらされ、血が凍りついた」――と後日デカブリストの一人は回想している。ニコライ一世があとで日記に記したように何よりもこわかったのは、「下層の民衆に反乱が広がることだった」。皇帝は霰弾を発射するよう命じた。

反乱部隊は銃火で応戦したが、霰弾が隊伍を乱したため動揺が起こり、逃亡が始まり、死傷者が出た。皇帝側の大砲は逃げる反乱部隊を砲撃した。反乱兵はワシリエフスキー島に渡ろうとしてネバ川の氷の上に出た。ミハイル・ベストゥージェフは兵を氷の上に整列させて、攻撃に出ようとした。だが霰弾が氷を打ち砕き、兵たちは川に落ちて死んだ……

夜ふけまでにすべてが終わった。反乱は鎮圧された。司法省の統計官コルサコフの計算によると、12月14日の死者は「将官1名、佐官1名、各種連隊の尉官17名、モスクワ連隊の近衛下士官93名、グレナジェルスキー連隊の下士官69名、近衛水兵一〇三名、騎兵連隊下士官17名、官吏39名、女性9名、年少者19名、下層民九〇三名。死者合計一二七一名」であった。

無事生き残ったデカブリストはルイレーエフの家に集まった。これが彼らの最後の集会になった。彼らはもっぱら訊問のさいにどう振る舞うかを相談した。反乱が失敗したことは明白だった。南部でのデカブリストの蜂起も失敗に終わった。12月14日の深夜から逮捕が始まった……

デカブリストの裁判

逮捕されたデカブリストの審理には、ニコライ一世自身が乗り出して采配を振った。審理は彼らの政治的要求や皇帝殺害の問題に集中し、思想は二の次にされた。5名のデカブリストが死刑を宣告された。一八二六年7月13日朝、反乱を指導し、積極的に活動したパーベル・ペステリ、コンドラチー・ルイレーエフ、セルゲイ・ムラビヨフ＝アポストル、ミハイル・ベストゥージェフ＝リューミンとピョートル・カホフスキーの5名は、ペトロパブロフスク要塞で絞首刑にされた。デカブリストの将校たちは降等され、官等や貴族の身分を剝奪された。帯剣はへし折られ、肩章や軍服は剝ぎ取られて火中に投げ込まれた。一二〇名余りのデカブリストがシベリアに流された。若干の将校は兵卒に降等され、戦争が行われていたカフカズへ追放された。ムチで打ち殺された兵士たちも処刑された者の中に加えなければならない。またカフカズへ追放された兵士も多かった。

30年後の一八五六年に、アレクサンドル二世が即位したときデカブリストの大赦とシベリアからの帰還許可が発表されたが、その時まで生き残っていたデカブリストは約40名で、あとは懲役中、流刑中に死んだ。

デカブリスト運動の歴史的意義

デカブリストの蜂起は、ロシアの革命運動史上大きな意義を持っていた。それは専制政治に対する武器を手にした最初の公然たる反対行動であった。デカブリストは「人民の目を覚ますのに役立った」（レーニン）当時の進歩的活動家たちだった。デカブリストが掲げた農奴制と専制に反対する闘争のスローガンは大きな歴史的意義をもち、長い間生き続けた。デカブリストはロシアにおける革命運動の幕を開いた。彼らの反乱は鎮圧されたが、彼らの革命的理念は生き残り、輝かしい未来を開いた。

ソ連共産党第27回大会に向けて

工業化路線を打ち出したソ連共産党第14回大会の60周年

ピョートル・ミハイロフ

世間が認めているとおり、歴史の教訓というものがある。ことしは20世紀の最大の侵略勢力に対する戦勝40周年の年だったが、私はそれを機会に、この戦勝の最も重要な前提の一つとなった出来事を思い出さざるをえなかった。その出来事とは60年前の一九二五年12月に、ソ連共産党（この大会のとき全ソ共産党（ボリシェビキ）となり、一九五二年の第19回大会のときにソ連共産党と改称された）の第14回大会がソ連の工業化計画を採択したことだ。この計画がタイムリーに実現されたおかげで、ソ連は強力で狡猾な侵略者との苦闘に耐え抜き、第2次世界大戦での進歩勢力の勝利に決定的な貢献をすることができた。

工業化"賛成"と"反対"

第14回党大会が開かれたとき、国の社会主義的工業化計画を策定したレーニンは、すでに他界していた。しかし彼の戦友たちは、重工業を発展させなくては「いかなる工業も建設できないし、重工業がなければ自主国家としてやっていけず、滅び去るだろう」とのレーニンの信念と同じ考えだった。一九二五年4月の党協議会でフェリックス・ジェルジンスキー最高国民経済会議議長は、「労農ロシアは、果たして鉄鋼以外のものに、つまりわが国を守ることができるような基地以外のものになっていいものだろうか……」と述べた。

国の工業化構想に反対した者もいた。同じ一九二五年4月の党中央委員会政治局会議の一つで、カーメネフは資本主義的包囲のもとではソ連の技術・経済的立ち後れは克服できないと述べた。ジノビエフはカーメネフを支持した。この二人は一九一七年10月、社会主義革命の前夜新聞に党中央委員会の武装蜂起決議の反対意見を載せて、ロシアのブルジョア臨時政府に革命が始まることを予告した。

構想を支持しながらも、構想の実現の可能性に首をかしげた者も少なからずいた。外部から借款を受けずに果たして大規模なソ連の工業の急速な発展が可能だろうかという点に疑問をもったからである。ブルジョア政府あるいは銀行にこんな借款の供与を期待するのは間違いであり、西側の主要工業諸国による資本の蓄積は、植民地と半植民地を略奪し、勤労者を搾取した結果であり、ソビエト権力はこれらにきっぱり反対してきた。こうして、魅力はあるが、高くつく構想を実現することは果たして可能か、という問題が出てきた。

多大の困難を伴うが、それは可能であるとスターリン中央委書記は断定した。スターリンはこれを一九二五年夏スベルドロフ記念大学聴講生との対談で述べた。

工業化の敵も自説を証明しようとした。一九二五年末に、当時最高国民経済会議で働いていたトロツキーは『社会主義へか、それとも資本主義へか？』というパンフを書き、その中で重工業の必要への人員、資金の"急激な移動"は、経済成長率を引き上げるどころか、鈍化させると主張した。トロツキーは工業製品の輸入増や外資を含む個人資本の導入を主張した。パンフの中でトロツキーは当時の国際分業の現状を"無視しないように"呼びかけた。周知のように当時ソ連は主に食糧と原料を生産する国であり、国際分業はソ連のこうした状態をそのまま維持するものであった。

大会の決議

一九二五年12月18―31日に開かれた第14回大会はこの問題に終止符を打った。ソビエト政権は成立以来9年目に入っていたが、そのうち5年は白衛軍や干渉軍との戦いに明け暮れ、戦争による国の損害額は約五〇〇億金ルーブルにのぼった。工業生産高は一九一三年比4―20%まで落ち込み、失業者は約一〇〇万人に達した。住民の大多数は読み書きができず、農民の大多数はトラクターを見たことがなかった。

大会では激しい論争が行われ、工業化反対派を含めて45人が発言した。結局大会は工業化の推進を決議し、この決議によって歴史にその名を残すことになった。こうしてソ連を機械・設備の輸入国から輸出国に変える経済方針が打ち出された。指令の一つは「ソ連が資本主義世界経済の付属国になるのを防ぐ経済的自立を保障し、そのために国を工業化し、生産手段の生産を発達させ、経済的機動力を発揮するための余力を形成する方針をとる」とうたった。

ではどうやってこれをやるか？　決議にはその方法も定められていて、すべての余力を活用すること、最も厳しく節約を守ること、社会主義的蓄積のテンポを促進するために国営工業、商業、協同組合の資金の回転率を速くすることが挙げられていた。さらに技術のレベルを引き上げて、それを土台に工業を展開すること、ただし市場の容量ならびに国の財政能力の枠を厳しく守ることとなっていた。

工業化の巨大な計画は人々の日常の必要を妨げなかった。党大会の指令の一つは次のように述べている。「ソ連の地方工業（地区、管区、県、州、共和国）の発展を全力あげて助長するとともに、住民のさまざまな要求の充足を見込むこの工業を組織するに当たって、地方のイニシアチブをできるだけ刺激する……」

大会は新しい帝国主義戦争と対ソ武装攻撃の危険性を考慮し、ありとあらゆる偶然性から国の安全を守り、国の防衛力強化のためのあらゆる措置をとることができる経済的余力をできる限り蓄えるよう、中央委員会に委任した。

構想の実現

一九二六―二七経済年度の工業投資額は約一〇億ルーブルであったが、3年後のそれはすでに五〇億ルーブルに達した。今日から見れば大した額には見えないかもしれないが、当時としては巨額であった……よく言うように、すべては比較すればはっきりすることであり、一九二五年10月1日現在の工業の固定フォンド額は約五〇億ルーブルであった。建設は全国で繰り広げられた。

一九二六年7月にはスターリングラードでソ連最初のトラクター工場の建設工事が始まった。同じ年の暮れには英国のSF作家H・G・ウェルズを驚嘆させたレーニンのロシア電化計画の第一陣――ボルホフ水力発電所が操業を始めた。一九二七年3月にはドニエプル川で水力発電所の建設工事が始まった。この発電所の周辺には大工業センターが創設されることになっていた。さらにそのころシベリアの穀物栽培地帯、森林地帯と中央アジアの綿花栽培地帯とを結ぶ一五〇〇㎞のトルクシブ鉄道の工事が始まった。一九二六―二七年には、シベリアのクズネツク、ウラルのマグニトゴルスク、ウクライナのクリボイログの三大製鉄所建設の大がかりな準備作業が行われた。スベルドロフスクの重機械製作工場の建設が計画された。

一九二九年は労働生産性の上昇での根本的転換の年となり、前年に比べて労働生産性は約13%上昇した。この年重工業製品の生産は31%増えた。ソ連は蓄積の問題をほぼ解決したのち、一九二九年から第1次5カ年計画に着手した。工業建設の規模はどんどん大きくなっていった。第1次5カ年計画中（一九二九―三三）には一五〇〇、第2次5カ年計画中には四五〇〇の企業が建設された。一九二八年から戦争になる前年の一九四〇年までにソ連の国民所得は5倍以上に、電力生産高は9・7倍に、出炭量は4・7倍に、出鋼量は4倍以上に、産油量は2・7倍に、それぞれ増えた。

しかし最大の飛躍を遂げたのは機械工業で、その生産高は20倍に増えた。ソ連は一九四〇年に約六万台の金属切削機械を生産し、英独の生産高を抜いた。品質もよくなった。一九三〇年代にあらゆるクラスの切削、管理・計測工具を生産できたのは米英独3国だけであったが、一九四〇年代初めにはソ連もこれらの工具を生産できるようになった。

工業への科学の成果の導入

もちろんこのような経済的後進国の工業化は、科学技術進歩なしには不可能であったろう。このことを自覚して党中央委員会は一九二七年春、科学技術関係の研究所、機関の活動と企業の活動とを固く結びつける決定を採択した。決定には、新設企業は科学技術の最新の成果を踏まえて創設されねばならないと述べられていた。

工業と科学が接近したおかげで、たとえばマグニトゴルスク・コンビナートは良質鋼の精錬を速く、大規模に開始することができた。ファシスト・ドイツの対ソ攻撃直後からコンビナートの専門家は、良質の装甲用鋼の生産を開始し、世界の鉄鋼業史上初めて分塊圧延機で装甲板を圧延した。

当時ソ連における科学技術進歩の報道は、外国でマユツバ扱いされることがあった。たとえばソ連で合成ゴムが試作され始めたという報道がそんな扱いを受けた。当時としては非常にセンセーショナルなことだったので、あの有名な米国の発明家トーマス・エジソンでさえ、この報道を疑い、「自分の経験や他の人々の経験からおして、いま短兵急に、やがては合成ゴムの生産に成功するだろうなどとは言いきれない」と語った。だがソ連はすでに三つの合成ゴム製造工場の設計に着手しており、それらは一九三二年に操業を開始した。ドイツで合成ゴムが製造されるようになったのはその5年後であり、米国はそれよりさらに5年後であった。

別の例もある。ソ連の原子力発電の創設に力を尽くした有名な学者ワシリー・エメリヤノフは、一九四〇年末にソ連の学者はウラン問題解決の鍵を握っていたと書いた。これは誇張ではなかった。戦後米国の科学者は、原子核分裂時代の2年目の一九四〇年末ごろ、ソ連の原子力の開発がこの分野の米国の水準並みであったことを認めた。

一九四一年6月22日、プラウダ紙は「ソ連のサイクロトロン」という記事を載せ、レニングラードにおける新加速器の建設をつたえた。それからちょうど13年後にソ連のオブニンスク市で世界初の原子力発電所が運転したのだが、前述の一九四一年6月22日に、創設労働に明け暮れたソ連は、突如ドイツ軍の攻撃を受けたのであり、その攻撃に耐えぬくことができたのは、ひとえに工業化のおかげであった。

不法攻撃とヒトラーの誤算

ナチス・ドイツは宣戦を布告せずに第一級の兵器装備をもつ一九〇個師団を対ソ戦に投入した。その時までに欧州を席巻したこの悪虐非道な国の力はきわめて大きかった。かねてから攻撃の準備を進めてきたナチス・ドイツは、三五〇〇両の戦車、五万門の火砲と迫撃砲、三九〇〇機余りの航空機を対ソ戦用として集結し、電撃戦でソ連を屠ろうと当てこんだ。当時工業面で主導

的な立場にあったファシズム国家の軍事・経済力は、フランス、ベルギー、オランダ、オーストリア、ハンガリーその他の国々の炭坑、鉱山、工場の生産を加えることによってさらに強化された。

ドイツ軍の奇襲と最初のころの兵器装備の優勢によって、ドイツ軍は有利に事を進めた。赤軍は戦闘しながら後退した。米国の軍事筋の評価によると、ドイツ軍は8週間以内に赤軍を粉砕できたはずだったという。幸いそんなことにはならなかったが、侵略者はソ連の人口の40%が住んでいた広大な地域を占領することができた。その結果ソビエト経済は出炭量の63%、銑鉄生産高の68%、粗鋼生産高の58%、アルミニウムのそれの60%を失った。一九四一年夏ヒトラーはソ連の〝経済的衰退〟を予告したが、これもヒトラーの最大の誤算の一つであった。

国の工業力を維持するために、一九四一年下半期に、敵に占領される恐れがあった地域から一三六〇以上の大企業が、ソ連の東部地域に疎開した。兵器装備の彼我の比率は次第に均衡し、やがてソ連に有利になった。

こうなったのは武器貸与法による連合国の武器供与のおかげではない。一九四一年7月―9月中に米国から供給されたのは戦闘機が59機とトラックが五〇〇台にすぎなかった。ドイツ戦車軍団がモスクワに向けて殺到した10月、ムツェンスク市付近の戦闘後すでに戦車戦の理論家、ドイツ軍のグーデリアン将軍は、ソビエト軍の装備がドイツ軍より勝っている苦い真相を止むなく認め、「いままでドイツ軍の戦車は量的に敵より勝っていたが、いまやその優勢も次第に敵側に移り、急速な連続的な成功は期待できなくなった……」と書いた。

一九四二年中ごろからソ連の工業成長率はどんどん上昇し、その結果戦時中のソ連の年平均の戦車と自走砲の生産高は約二万四〇〇〇両（ドイツ側は一万三〇〇〇両強）、軍用機の生産高は二万七〇〇〇機（ドイツ側は一万九七〇〇機）、火砲は一二万四〇〇〇門（ドイツ側―一万二〇〇〇門）、迫撃砲は八万六九〇〇門（一万七〇〇〇門）であった。もちろん米英からの供給もしかるべき役割を果たした。しかし戦時中全体で米英からの供給量はソ連で生産された工業製品の約4%にすぎなかった。

ルールに勝ったマグニトゴルスク

一九四二年末にはソ連とドイツの作戦行動中の軍隊間の主要兵器装備の比率は、ソ連側に有利になった。それは侵略軍が兵員約一五〇万人、火砲と迫撃砲一万二〇〇〇門、戦車と突撃用兵器三五〇〇両、空軍機三〇〇〇機を失ったスターリングラード戦の時である。しかしヒトラーはドイツと国防軍の兵器装備の優勢さを信じ込んでいて、スターリングラード戦の報復のための「とりで」作戦では、やはり兵器装備、まず戦車に大きな期待をかけた。従って一九四三年夏のクールスク付近の50日にわたる戦闘では戦車が主な打撃力となった。クールスク付近のプロホロフカ村地区では第2次世界大戦中最大の彼我の戦車と自走砲が激突した。

クールスク会戦には双方から計一万三〇〇〇両余りの戦車と自走砲が参加した。これは直接の戦闘員の戦いであっただけでなく、設計者や鉄鋼労働者――ひとことで言えば二つの産業の戦いでもあった。たった1日でドイツ・ファシスト軍は四〇〇両の戦車と自走砲を失った。ソビエトのT34戦車とズベロボイ対戦車砲がドイツ軍のティーゲル、パンテル、フェルディナントを砲撃した砲弾の鉄は、マグニトゴルスク鉄鋼コンビナートで生産されたものだった。クールスク付近でのドイツ軍の損害は、兵員約五〇万人、戦車一五〇〇両、火砲三〇〇〇門、航空機三七〇〇機以上と破滅的であった。この敗北後ドイツ国防軍は終戦までひたすら防衛、後退を繰り返すだけであった。

マグニトゴルスクはルールに打ち勝った――戦時中と戦後に人々はこう言ったものだ。この勝利はソビエト兵の勝利であっただけでなく、ソビエト工業の勝利でもあった。戦前の5カ年計画や工業化の体現であったマグニトゴルスクは、帝国主義の大製鉄所ルールよりも強力だったし、機動力を発揮した。

科学技術進歩を重点目標に

一九二五年12月の第14回党大会の決議により工業化の方向に向けられたソビエト人の巨大な労働と社会主義の経済的可能性こそは〝奇跡〟であった。戦後米国の歴史家N・デービスは、戦前の数次にわたる5カ年計画期間中に「ソ連は真の工業大国になり、第2次世界大戦が示したように勝利のための諸条件を確保した」と書いた。

米国の専門家のこの判断は、歴史がまさに教訓を垂れていることを証明している。しかし残念ながら全部の人がこの歴史の教訓を身につけているわけではない。身につけていれば軍拡競争を強めていけばソ連経済はすっかり消耗してしまうだろうとか、〝スターウォーズ〟計画が実現すればソ連は〝技術面で行き詰まって〟しまうだろうとか、ソ連は自分に対する技術面の挑戦に応じることはできないだろうなどとは言えないだろう。歴史が証明しているとおり、技術的優位に立つことを当てこんだり、対ソ軍事優位に立つためにソ連経済をへとへとにすることを当てこんだりするのは、妄想である。

いまソ連共産党は、国民経済での大々的な集約的な発展方法の利用や短期間に国を最も先進的な科学技術のレベルに引き上げることに、国民のエネルギーと国の経済力を向けている。

疑いもなく第27回党大会は、巨額の資金を平和的建設から切り離す軍拡競争の停止に全力を尽くすだろう。しかし、たとえ軍拡競争が宇宙的規模のものになっても、ソ連経済は息切れをしないだろうし、ソ連の科学技術は戦略的優位を維持するのに十分な力をもっている。この点を疑ってはならない。

ことしソ連は、社会主義工業化のおかげで可能となった勝利の40周年を祝った。第27回党大会後まもなく、ユーリー・ガガーリンによる人類最初の宇宙飛行の25周年を迎える。この飛行はソ連の科学技術進歩を促進する底力をはっきりと示したものであり、第27回党大会は、科学技術進歩を質的に新しいレベルに引き上げることを重点目標として確認するだろう。

日ソ協会の記念祝賀会



写真は記念祝賀会でギービ・カルマヘリゼ版画展のテープカットをするチジョフ駐日ソ連公使と石黒・日ソ協会会長（写真提供＝永井康隆氏）

11月11日、東京・千代田区の学士会館で日ソ協会主催の10月革命68周年・日ソ国交回復29周年記念祝賀会が盛大に開かれ、日ソ親善月間参加のため来日したソ日協会代表団も出席した。祝賀会の会場では同時に、代表団員の版画家ギービ・カルマヘリゼの作品展も行われた（カルマヘリゼは全ソ美術家同盟会員、オリョール教育大学教授）。

武生市でシベリア写真展

11月2日から4日まで福井県武生市の中央公民館で、日ソ親善協会福井県支部主催のTASSシベリア写真展が開かれた。会場にはタス通信社提供のシベリアの写真をはじめ、ソ連の民芸品が多数展示された。会期中、約2000人が写真展を訪れた。

写真展を訪れたV・デニソフ・大阪駐在ソ連総領事と笠原・武生市長



名古屋の中学でトルクメンの児童画展



11月5、6の両日、名古屋市の市立豊正中学校の体育館でソ連中央アジア、トルクメン共和国の子供たちの絵が展示された。これらの作品はことしの4月、日ソ親善協会の招きで日本を訪れたトルクメン共和国代表団の民族アンサンブルが名古屋のワールド・インポート・フェアに出演した際、横山利秋・日ソ親善協会理事長の協力で、豊正中学校の生徒たちの作品と交換されたもの。今回の展覧会は同校の秋の文化祭にあたって、日ソ親善協会愛知県支部と同校PTAが共催した。約三〇〇〇人がトルクメンの子供たちの作品を観賞した。

展示されたトルクメンの児童画の一部（写真提供＝日ソ親善協会愛知県支部）

新刊紹介

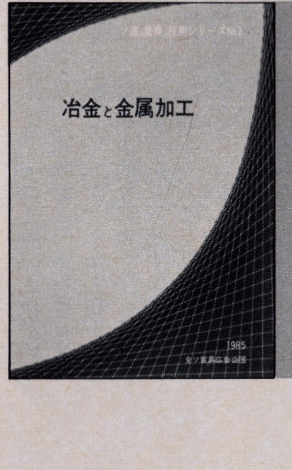
『冶金と金属加工』

――ソ連の産業と技術シリーズNo.2

本書は冶金と金属加工の分野のソ連の最新技術情報を一冊にまとめたもので、全ソ貿易広告公団が日本で発行した。これは一九八二年から全ソ貿易広告公団の提唱で始まった産業分野別技術紹介論文・広告集の日ソ相互交換企画の枠内で発行されたもので、一九八三年発行の『最新の技術ライセンス』に次ぐ2冊目。日本側もこれまでソ連向けに『工作機械とロボット』、『食品産業』の2冊を発行した。

本書はA4判一七二ページ。希望者は日本側企画窓口の左記へ葉書で申し込めば、無料で送ってもらえる。

㈱プロムテック（郵便番号167東京都杉並区荻窪5―14―4―208、電話03・392・6567㈹）



チェス会館のクイーンたち

堺女子短期大学教授　笹野　貞子
写真　東　正夫



国際トーナメントの行われるチェス台でツェローゼ館長の説明を聞く筆者

遊び下手な私は、チェスなどというゲームは映画のシーンでしか知らない。広々とした庭園の木陰で、美男美女が何か向い合い、飲みものを片手に優雅に興ずる映画でのチェスのシーンは、私にとってまさに夢の世界のようなものだ。

古い家並みから歴史の流れを感じさせるトビリシ（グルジア共和国首都）の街は、渓谷のような山の下を河が流れ、緑に囲まれてとても美しい街だ。そんな街並みに目を奪われていた私は、急に車がとまり案内されるがままに入ったとたん、映画のシーンの中に飛びこんだような錯覚をおぼえたものだ。

そこは、世界的にも有名なチェス会館だった。世界選手権で次々と女子のチャンピオンを輩出したグルジアは、その記念として一九七三年にこのチェス会館を建設、一九八二年には国際チェストーナメントの会場として多くの名試合がくりひろげられたという。全くといってよいほどチェスのことを知らない私に、丁寧に説明してくれる館長のリリ・ツェローゼ女史はチェス審判の国際資格をもつ、かつての名選手だったという。館長は誇らしげに、ここグルジアは女性が女子世界チャンピオンの座を守り続けているということをいち早く説明してくれた。ノナ・ガプリンダシビリは十七年間も王座にあり、現在はマイヤ・チェブルダニーゼがその座にあるという。彼女たちの写真の前に立った時、私が幻想をいだいていた優雅なおあそびとしてのチェスのイメージとは掛け離れた透き通るような厳しい目を感じとった。

ノナ・ガプリンダシビリは十七歳にしてチェスのチャンピオンになったというが、幼少の時から激しい訓練に耐えたという。端正であってもその思慮深い顔から、私には厳しい訓練の時間が伝わってくるように感じられた。王座を譲った現在、沢山の弟子の養成に励んでいるということだ。

千人以上も収容できるだろうか、大ホールの舞台にチェス台が十二台置かれてあった。これが国際トーナメントが行われたチェス台だという。「この駒は特別に注文したすばらしいものです」と館長は説明しながら私の手に静かに渡してくれた。初めてさわった駒はズシッと重みが伝わるように私は感じたものだ。二階の廊下に出ると、チェス台が何十台もずらりと置いてあった。この台はチェス盤がうめこまれたもので芸術作品のようにきれいだった。しかも壁にはチェスの歴史を物語った彫刻がいっぱいに広がり、まさに壮観であった。

紀元前、インドにえらい王様がいた。彼はあらゆる経験をし、あらゆる楽しみを味わい尽くした。しかし精力的な王は、より刺激的な興奮を与えてくれるものへの興味を募らせずにはいられなかった。そこで王は、自分に興奮と満足を与えてくれたものには莫大な褒美をとらすという御布令を出した。沢山の人々がいろいろな趣向をこらして王を訪れたが、王はどれも既に経験済みであり、何の興味も感じなかったという。そんなある日、一人の年老いた身すぼらしい男が王を訪れた。彼は汚ない包みからチェス盤と駒をとり出すと、早速王に説明を始めたという。王の目がたちどころに輝き始めたのは言うに及ばない。これがチェスのはじめだという。インドに比較的近いグルジアにチェスが入ったのは、それから間もなくだということだ。だからグルジアのチェスの歴史は相当古いことになる。

グルジアの女性は、嫁入り道具には必ずチェスを持って行くということだ。また女性が男性にプレゼントするとして、チェスが最適な品として選ばれるというのだから、いかにチェスが日常生活の中の一部分であり、知能訓練の一役を担っているかが分かる。

にこやかにしかも誇らしげに胸を張って館内を一巡した館長のツェローゼ女史は、最後に館長室に案内してくれた。彼女の机の上には大きなチェス盤が置いてあった。彼女は私と一手打つことを提案した。何も知らないということは最大の強さだ。私は臆することなくこの国際試合を受けて立つことにした。



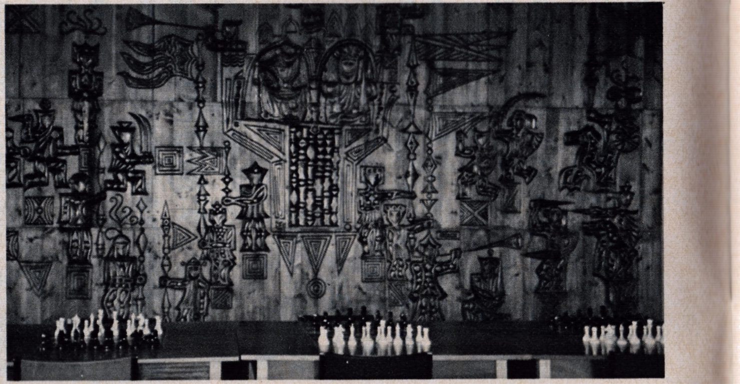
一つ一つの駒の何と美しいことだろう。馬の頭をした駒、兵士のような駒、もちろん王様は堂々としている。国際審判を務めるかつての名選手の館長との試合で、私が勝ったらどうしようと、私は映画の中の美女の一コマを思い浮べていた。

その時若いセクレタリーが、紅茶にチョコレートとメロンを運んできた。私がどんなにほしそうな顔をしたのだろうか、「この試合は次の訪問までおあずけにして、先にチョコレートを食べましょう」と宣告した。さすがに名審判である。

そこで私はこんな質問をしてみた。

グルジアの生んだチェスの女子世界チャンピオンたち

下　チェス会館の廊下の彫刻とチェス台



「女性のチャンピオンが次々と誕生するのに、どうして男性のチャンピオンが出ないのですか」と。彼女は声を出して笑いながら、「とてもむずかしい質問ですね」と問をおきながら、「グルジアの男性はお酒を飲み過ぎるからでしょうね」と顔をくしゃくしゃにした。次々と女子チャンピオンを育てた彼女の顔は哲学者のような落ち着きの中にやさしく、しかも激しい闘志のようなものを私は感じたのである。

女性の場合、一試合五時間、それを十二試合の勝負に打ち勝って世界のチャンピオンの座に座れるのだという。グルジアの女性の旺盛なエネルギーと知性は、この王座をいつまでも守り続けるに違いない。私はそれを念じながらチェス会館に別れを告げたものだ。

大きな樹が生い茂った公園のように静かで美しいところにチェス会館は建っていた。

催し物のお知らせ

☆エストニアの人形劇エストラーダ

前橋・群馬県民会館小ホール（12月２日）、松江・福祉センター（12月４日）、名古屋・名演小劇場（12月６日）、静岡・市民文化会館大会議室（12月７日）、浜松・福祉文化会館（12月８日）、東京・プーク人形劇場（12月９―11日）、取手・福祉会館（12月12日）

▽お問い合わせは、プーク人形劇場（東京都渋谷区代々木2-12-3、電話03・379・0234）

☆ロシア歌曲研究会　第Ⅵ回定期演奏会

12月８日（日）　午後６時

東京・都市センターホール

入場料・2,500円／後援・日ソ音楽家協会

▽お問い合わせは、Ｍｉｋコンサート・インターナショナル（電話0473・34・6585）

☆ソビエト名作映画鑑賞会

オペラ映画「ホヴァンシチナ」

12月19日（木）　６時15分開映

▽会場・東京・大手町・日経小ホール

▽入場料800円（会員600円）

▽お問い合わせは、㈱日本海（電話03・262・4131）

☆リュボーフィ・チモフェーエワ・ピアノ演奏会

米子市公会堂（２月18日）、山口市民会館（２月19日）、東京・五反田簡易保険ホール（２月20日）、松山市民会館（２月21日）、小浜市民会館（２月23日）、浜松市民会館（２月25日）、東京文化会館（２月26日）、静岡市民文化会館（２月27日）、横浜・神奈川県民ホール（３月１日）、小諸文化会館（３月４日）、室蘭市民会館（３月６日）、北見市民会館（３月８日）、旭川市文化会館（３月10日）、青森市民文化ホール（３月12日）

▽お問い合わせは、東京労音（電話03・265・6361）

ノーボスチ通信 特派員報告

孤立する人種差別主義者

S・ボリソフ記者（ジンバブエ）

南アフリカの人種差別政権に対する西側の偽善的政策は、アパルトヘイトの後見人たちを国際場裏でますます孤立に追いやっている。その新しい証拠となったのは、ジンバブエの首都でこのほど閉幕したアフリカ、カリブ海水域、太平洋の66カ国閣僚会議の総会の結果である。

総会での南アフリカ情勢の討議は、人種差別政権とそのパトロンの帝国主義者に対する激しい抗議の合唱になった。

「この会議が行われているいまも、人種差別政権は、自由をめざす闘士を情容赦もなく弾圧し続けている」と南アフリカ地域諸国を代表して発言したボツワナのンワコ通産相は激しい口調で述べた。

南アフリカ共和国当局は、ナミビアの独立問題をアンゴラにキューバの義勇兵が駐在していることと故意に結びつけ、ナミビア人民にカイライ〝臨時政府〟を押し付け、国連安保理事会決議第四三五号の実行を頑としてはねつけて、ナミビアの植民地的占領をいつまでも続けようと努めている。

南アフリカ共和国政府の人種差別主義者は、地域紛争の国際化に懸命である。モザンビークとアンゴラに対する直接の隠然たる侵略は10年前から続いており、アンゴラ一国に与えた損害額だけでも一〇〇億ドルにのぼっている。

マインツからの警告

V・マルコフ記者（マインツ）

軍拡競争を抑制するためには、まず核兵器の実験を停止する必要がある。核実験のモラトリアムは、軍事的優位をめざさない者なら誰でも受け入れ可能である。各人の健康を守る医療従事者は、毎日軍拡競争に七〇億マルクが使われている一方で、世界の子供が毎日四万人も飢え死にしていることにがまんがならない。11月初め西独のマインツで開かれた西独医師の反戦運動会議の声明も、このことを述べている。会議には「核戦争防止国際医師の会」の西独セクションの代表三五〇〇人が参加した。

「われわれは核戦争を警戒する。広島から40年たつ今、軍拡競争をやめ、軍縮をかちとらねばならない」――こう書いた大きな横断幕が4日間マインツ市の大ホールを飾った。会議ではさまざまな問題が討議されたが、結局「米国の宇宙攻撃兵器開発計画は戦争の脅威を深める」というのが一致した意見であった。

「SDIの推進は相手を核・宇宙軍備交渉の土俵に引き出すと米国は主張しているが、これは世論をごまかそうとするものだ。SDIは防衛目的とは縁もゆかりもない。実のところ米国は宇宙の盾をつくると同時に、第一撃戦略ミサイルを増強して核の剣を得ようとしている」とゲルト・バスチアン連邦議会議員は語った。

エチオピアの発電所建設

E・ババザーデ記者（アジスアベバ）

地質学者のアレクサンドル・ユトケビチはちょっと力をこめて石ころだらけの地面に棒を突き立てて「ここはモスクワと同じ経度ですよ」と言った。

記者たちが立っている所から数十mの深い渓谷の底にババーシェベリ川が流れていたが、地勢も季節も手伝ってその水勢は激しかった。ここがメルカ・バカナと呼ばれるエチオピア最大の建設工事の現場だ。この名前は古代オロモ語で、言語学者でも翻訳はむずかしい。

太古からこの地方の遊牧民が浅瀬を求めて家畜を追いながらこの川の右岸の青々とした牧草地へやってきたということだけは分かっている。メルカとは少しの水、浅瀬のことだ。

果てしないサバンナと、川岸の密林には3年前までサイ、ハイエナ、ダマジカ、オオガラス、イノシシがいたが、建設者たちがやってくると、みな奥地へ姿を消し、好奇心の強いサルやヒヒが時々工事場に現れて手でブルドーザーとか掘削機に触っていくだけだ。

エチオピア各紙の資料によると、エチオピアできちんと電力を供給されている都市と都市型集落は約一二〇程度で、そこに住む人たちの数は合計三〇〇万―三五〇〇万人だという。エチオピアの電力資源はアフリカでは第2位なのに、2％しか利用されていない訳だ。昨年9月のエチオピア労働党創立大会で採択された社会・経済発展10年計画でメルカ・バカナ水力発電所の建設が目玉になっているのはこのためだ。この発電所が完成しチェコスロバキアの専門家たちがきて機械設備を取り付けると、この国の発電能力は一挙に1・5倍になり、目下3県で建設中のほかの工場が操業できるようになる。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年11月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、一九八五年10月22、23日にソフィアで開かれたワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会会議の結果を審議した。

ソ連代表団の活動が全面的に承認され、政治局は政治諮問委員会会議が最重要の意義を持つ国際的な出来事であったことを指摘した。

政治諮問委員会会議が採択した声明の重要な意義が強調された。声明には、現在の国際情勢の緊要な諸問題に関してワルシャワ条約加盟諸国が合意した路線が述べられている。深く考量された壮大なこの文書の中では、自らに対する軍事的優位を許さず、欧州大陸ひいては世界全体における軍事的対立のレベルの引き下げをねばり強く追求するという社会主義諸国の断固たる意向が表明されている。会議が打ち出した、国際科学技術協力にグローバルな性格を与え、それをもっぱら平和目的に従属させる必要があるという考えは、原則的な意味を持っている。

ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議は、全ソ社会主義競争の成績優秀者、科学技術、文学、芸術、建築の働き手に対する一九八五年度ソ連国家賞の授与に関する決定を採択した。決定の文章は新聞雑誌に公表された。

政治局はM・S・ゴルバチョフ同志のブルガリア人民共和国親善訪問およびT・ジフコフ・ブルガリア共産党中央委員会書記長との会談の結果を審議し、承認した。

R・ガンジー・インド首相との会談に関するM・S・ゴルバチョフ同志の報告が聴取され、承認された。会談は友好関係を強化し、多面的な協力を発展させ、両国民の利益、アジアおよび全世界の平和と安全の事業のために国際舞台での協力に努めるという相互の意欲を改めて示した。

ソ連共産党中央委員会政治局会議では、その他いくつかの内外政治問題に関する決定が採択された。

（プラウダ紙11月1日号）

ソ連国防省の声明

事態の意図的な歪曲をめざしてNATOで広められている主張に関連して、ソ連国防省は以下のことを声明する。

ソ連欧州ゾーンにおけるSS20ミサイルの数は二四三基であり、ソ連全域でのSS20ミサイルはNATOで言われている四四一基よりはるかに少ない。

（プラウダ紙11月2日号）

バムのコダル・トンネル開通

10月革命記念日を翌日に控えた11月6日、バイカル・アムール（バム）鉄道最後の〝難関〟――全長2kmのコダル・トンネルが開通し、バム鉄道チタ区間全線にわたって旅客列車の運行が始まることになった。

営業運転までにはコダル・トンネルはさらに手を加えなければならないが、主要な課題はすでに克服された。

コダル・トンネルの開通によって、ビチム――チャラ――ティンダ間八二〇kmにわたって直通列車の運行が可能になった。（プラウダ紙11月7日号）



これで生産性が上がるぞ（D・タイロフ作、トルード紙11月5日号）

北極海航路の実験

ムルマンスク海港所属のディーゼル船コラ号は、世界で最も困難な航路である北極海航路で、輸送船として世界で初めて、1シーズン4往復の偉業を成し遂げた。

世界の航海史に新たな1ページをつけ加えたこの快挙も、この秋北極海で展開されている実験の一部分にすぎない。北極海航路東部セクターでは、11月としては初めて、輸送船と砕氷船の活動が続けられている。この海域にはいま2隻の強力な原子力砕氷船ブレジネフ号とシベリア号が投入されており、コラ号はカナダのバンクーバー港からムルマンスク港まで北極横断航路をたどり、すでに最も困難な区間を通過した。続いてディーゼル船チクシ号も同じ航路をたどっており、砕氷船ブレジネフ号とシベリア号がただちに氷面開削に向かうことになっている。

（イズベスチヤ紙11月6日号）

訂正 21号20ページの写真説明で「グル・エミル廟」と「サーマーン朝一族の廟」の説明が入れ違いになっていました。お詫びして訂正します。



ボールを使った奇術の手さばき







▼モスクワ・マジシャンクラブの壁暖炉の間に集まった会員の一部



▼会員の最年少、11歳のカーチャ・メドベージェワ。奇術の"神童"の声が高い。

仕事のあとは奇術で

――モスクワのマジシャンクラブ

本誌記者 ミハイル・リャンペ
カメラ Y・ルイブチンスキー

18・11・81――この数字を上から下へ、逆に下から上へ読んでも同じだし、裏からすかしたり、鏡を立てて上下左右半分ずつ見てもやはり同じだ。数字の意味する一九八一年11月18日はモスクワ・マジシャンクラブが創立された日である。

モスクワ・マジシャンクラブのウラジーミル・ルドネフ会長はモスクワの



◀鮮やかな手さばきでトロリーバスの検札係ワジム・カルムイコフが演じるトランプ手品



▼民警士官ニコライ・ベロウーソフの手の中で人形は生き返る。



催眠の術

バラエティー劇場のプロの芸人だが、副会長のアナトリー・カルタシキンはまったくのアマ。会員約三〇〇人のこのクラブには、ほかにもアマチュアが多数いる。

本職との使いわけ

42歳の工学博士候補アナトリー・カルタシキンは、自分が講師を務めるモスクワ航空大学では、頼まれても決して奇術を披露することはないが、同僚の家にお客によばれた場合は、希望に応じる。しかし職場では、ぼくは学者だ、マジシャンじゃないよとはっきりことわっている。

ところがある日、カルタシキンは自分の主義にそむいた。口頭試験の最中、彼は二人の学生がカンニング・メモをもっているのに気がつき、二人のところに行って何か言いながら、そっとマジックの手を使ってカンニング・メモを取り換えた。試験官の前に出たときの二人の驚きようといったら……二人は結局試験にパスしたが、それは数日後のことだった。

カルタシキンはマジシャンクラブで新しい奇術を考案するマジック創作部を指導している。トランプのマジックだけでも世界中で約三万手あるといわれているから、新しい技術を考え出すのは容易ではない。

カルタシキンの夢は奇術の理論を確立することだ。マジックの手を説明した本は多いが、彼の考えではこれらの本はどんなに良心的なものでも、しっかりした科学的態度や体系化が欠けているという。

カルタシキンはプロのマジシャンになるつもりはない。大学の仕事が気に入っているし、年中巡業で家族と長いこと離れて暮らす生活などいやだ。せめてモスクワのバラエティー劇場でこういったアマ芸人が出演できるようになればよいのだが、と思っている。

新しいマジックづくりの秘訣

マジック創作部の仲間ワジム・カルムイコフはカルタシキンとは違って、「プロになろうか？」と時々考える。なにが彼を思いとどまらせているのだろう？　彼の考えはこうだ。プロになれば新しいマジックをつくり出す時間は非常に少なくなる。しかし新しいものをつくり出すには独特の気分や平静さ、集中力が要る。カルムイコフは時間に追われてあくせくするのがいやなのだ。

彼はカルタシキンと組んで新しいマジックを考案しているのだが、カルタシキンは一つの出し物のうち観客に見える部分をつくり、カルムイコフは肝心かなめのトリックの部分を考え出す。

では彼はどうやって新しいマジックを考案するのか、その一例をあげよう。

彼が家に居てテレビで次のようなアニメを見ているとする。湖からワニがはい上がってくると、湖の水の量が減る。次にカバも上がってくる。水位はますます下がる。カメが上がってくる。湖は小さな水たまりになる。これを見てカルムイコフは、にごった液体の入ったコップから奇術師が球をつまみ出すと液体の量が減り、そのあとハンカチーフを抜きとると――コップは空っぽといった奇術を考え出すのだ。

カルムイコフは道具を使った奇術だけでなく巧妙な手さばきによる奇術も見せる。数年前まで彼はガラス工として働いていたが、高温にさらされて手の動きが鈍ってきたのがきっかけで、ガラス工をやめ、現在は市電やトロリーバスの検札係をしている。彼が検札係の仕事を気に入っているとは言えないが、その代わり指にはまったく支障はない。

多芸多才のお巡りさん

モスクワの民警士官ニコライ・ベロウーソフはあらゆるものに興味をもち、首をつっこんでいる。まず彼は古銭の収集家で、コレクションの中に古代ローマ帝国時代の貨幣があることが自慢である。彼は音楽家でもある。クラシックギターもエレキギターも演奏する。詩作もする。チェカンカ（金属の打ち出し細工）も制作する。アマチュア写真家で、古いカメラとついでに古い蓄音器を集めている。おまけにアマチュア無線家で、西欧、米国、カナダ、ラテンアメリカ、ニュージーランド、アフリカにいるたくさんのハム仲間が彼のコールサインを知っている。

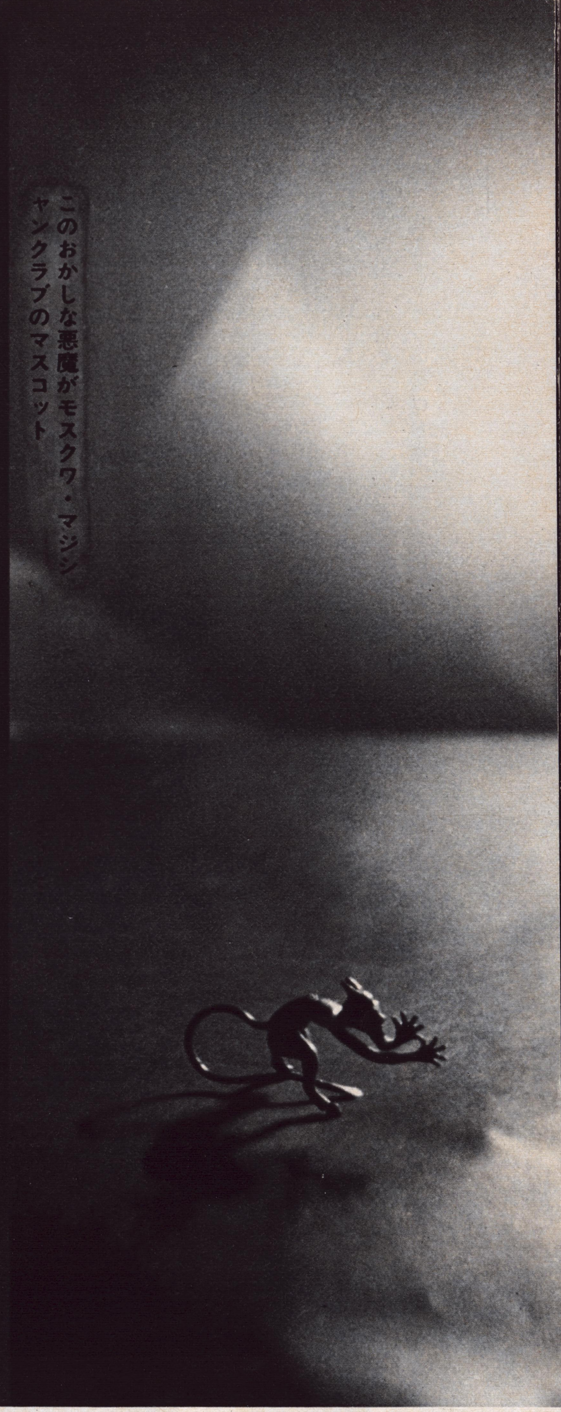
彼はいつもトランプとコインとチェの輪が入った袋を持ち歩いている。自由な時間ができるとすぐに袋からどれかを取り出す……　彼は見た目は簡単そうに見えて、人々をアッと言わせるような奇術が好きだ。例えば、皮製のケースに入った一組のトランプをテーブルに置き、観客に言う――「なんでもいいからカードを一枚、頭に思い浮かべて下さい。それから胸の中でそのカードを裏返して下さい」。次にベロウーソフはケースを手にとり、開けて客にカードを取ってくれるよう頼む。彼自身はカードに指一本触れていない。観客はカードがすべて表向きになっていて、ただ一枚だけ、それも先ほど頭に浮かべたカードだけが反対向きになっているのを発見する……

マジックの天才少女

モスクワ第27学校4年のカーチャ（エカテリーナの愛称）・メドベージェワはマジシャンクラブの最年少者である。クラブ員は彼女のことを天才



なにやら本当に魔法が起こりそう……



このおかしな悪魔がモスクワ・マジシャンクラブのマスコット

少女だという。この11歳の少女はモスクワの芸術家中央会館、俳優会館、外国の大使館といったプロが出る舞台に堂々と出演している。

カーチャが7歳のとき、父親の友人が彼女に少しばかり奇術を見せ説明した。カーチャはすべてを記憶し、しっかりと覚えてしまった。彼女が公衆の面前で初めて奇術を披露したのは、1年生を修了したときの学芸会だった。そのあと、カーチャは、奇術が面白くてたまらなくなった。奇術のいろいろな手を学び、舞台技術を身に付けた。どれも本を見ての独学だが、学校の催しや家庭のお祝いで芸を披露した。

カーチャが10歳のとき、お父さんがマジシャンクラブに連れて行った。会長のウラジーミル・ルドネフは、こんな小さな子が何を見せるというのだろうか、と疑わしげな目で父娘を見た。箱からおもちゃのウサギをひっぱり出すのが関の山だろうと高をくっていたが、カーチャがボールを使ったいくつかの奇術を見せると、ルドネフは大喜びし、すぐさまカーチャと一緒に稽古にとりかかったのだった。

いまルドネフ会長はカーチャを特訓中だ。バラエティー界の新星エカテリーナ・メドベージェワの名がとどろくのも間もないことだろう。

今日のソ連邦

一九八五年12月15日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03・447・3536）
印刷・発行所（株）新時代社（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1−44・電話03・293・4881）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）